
可憐な王子の受難の日々

青柳朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

可憐な王子の受難の日々

【Nコード】

N4739C

【作者名】

青柳朔

【あらすじ】

十五歳になった王子のアドルバード（シスコン＋ヘタレ）は、双子の妹・リノルアースの『お願い』を聞いてしまったがために、女装して他国へ訪問することになってしまう。しかもその訪問先のアルシザスでとんでもない災難に巻き込まれてしまって！？ シリーズ第二弾『可憐な王子と騒がしい恋の嵐』完結しました。

第1話：お願いがあるんだけど

可愛い妹からのお願いは、ワガママだと分かっただけでもついつい頷いてしまう。妹に甘い自覚は十分にあったアドルバードだが、それが不幸の始まりであるとは露ほどにも思わなかった。

がたがたと揺れる馬車の中。向かいに座る騎士は呆れたように呟いた。

「……いいかげんに機嫌を直してくれませんか、アドル様」

アドルバードの騎士　レイの青い瞳がこちらを困ったように見つめている。小さな窓の向こうにあるのは針葉樹の森だ。祖国ではよく見るその景色も、もうじき見えなくなるだろう。行き先は蒸し暑い南国なのだ。

「この拷問具みたいな服が脱げるならすぐに機嫌も直るさ。大体、無理があるだろ！　女装してリノルのふりをするなんて！」

「無理があると思うなら、初めからリノル様からのお願いを聞かなければいいんですよ」

冷静なレイの言葉に、アドルバードは言い返す言葉に詰まった。

レイの言うことはまさにそのとおりだ。初めから自分が妹のリノルアースのお願いをほいほいと聞かなければ、コルセットで締め付けられることも、危険なハイヒールを履くこともなかっただろう。鬘だって重い。髪の毛もこれだけ長いとけっこうな重量があるんだなと今まさにアドルバードは実感している。

「それに、アドル様が考えるほど無理でもありません。双子というだけあってリノル様にそっくりですし、誰もが女だと信じて疑いませんよ」

「それ、かなり心にぐっさり刺さるんですけど」

男がそんなことを言われて嬉しいと思うはずがない。フォローのつもりなのだろうが、間違いなく逆効果だ。

アドルバードとリノルアースは双子の兄妹だ。生まれてから十五年間、男女ということもあってそんなに似ていない気がしていたのだが、こうして女装してみると驚くほどによく似ているということを思い知らされた。

実際は、これほどまでに似ている必要はないのだ。これからリノルアースとして会う人物は、本物のリノルアースと会ったことがないのだから。重要なのは女に見えるか見えないかであって。

「……レイ、俺は女に見えるか？」

「正直に申し上げるのなら、今のアドル様は見事な姫君ですよ」
がつくりと肩を落としつつもそれでいいのだ、とアドルバードは自分に言い聞かせた。女装しているとバレた時の方がずっと痛い。

リノルアースはそれはそれは美しい姫だと周囲の国では有名になっていた。身内の鼻肩目を抜きにしても、リノルアースは可愛らしい。赤みがかかった金の髪はゆるく波打ち、晴れた日の空の色の瞳はどこまでも澄んでいる。肌は象牙のように白く透き通り、一見するとリノルアースはとても華奢な、弱々しい乙女だ。

つまりは外見上の特徴はアドルバードも同じなのだが、髪はもちろぬ癖がでるほど伸びていないし、肌は毎日の剣の稽古のおかげで健康的に焼けている。

吟遊詩人には花や月や太陽に例えられるリノルアースは、実際はかなりのお転婆な姫君だ。そして使えると思ったものはたとえそれが血のつながった、しかも同じ日に生を受けた双子の兄であろうと迷うことなく使う女だった。策士な妹を持つ兄は辛い。

今回も、そんな彼女の涙に騙されたのだ。

「お兄様、お願いがあるんだけど」

部屋にやって来て、につこりと、花のように可憐に微笑むと同時に、リノルアースは逃亡を図ろうとするアドルバードを捕まえた。

「なんで逃げるのかしら」

「おまえが俺を兄と呼んだときはろくなことがないって知ってるからな」

「うふふ、よく分かってるじゃない。だから好きよ、アドル」

リノルアースの笑顔そのものは実に無邪気なものだったが、それがアドルバードにはとてつもなく恐ろしく感じた。ほんの数メートル先にある出口が恋しい。

「お願いがあるの、アドル。私ほんつとうに困ってるの。助けてくれるわよね？」

「嫌だ。おまえは俺が協力しなくても自力でどうにかできるのに面倒事を俺に押し付けようとしてるだけだろ。絶対にお断り！」

ここは男としてきつちり言っておかなければ、とアドルバードは心を鬼にしてリノルアースを振り切った。リノルアースがやるうと思えばたいいのことは出来るに決まっている。困っている、というのも面倒だというくらいで実際リノルアースの手にかかればあっさりと解決するようなものばかりだ。

「……………ひどい」

ぼつり、とリノルアースが呟く。その目はかすかに潤んでいる。

ここで騙されては駄目だと自分に言い聞かせながら、潤んだリノルアースの瞳にかなり心が揺らぎ始めた。

「アドルは私がどうなってもいいって言うのね。そうよね、双子って言っても結局は他人だもの。自分の半身のように思ってるのは私だけだったのね」

いや、どんなにワガママで性格が悪かろうと可愛い妹だと思っし、昔は本気で二人で一人的なことも考えていた。大事な妹だ。声に出してしまえば調子にのるから言わないけど。

「リ、リノル。俺は何もそこまでは……………」

言っていないぞ、と言おうとリノルアースの顔を覗きこむと、彼女

の白い頬を水滴がつつた。

「言ってるじゃない。アドルは私の貞操なんてどうでもいいんでしようー!?」

「て、て、て、貞操っ!? お姫様が……っていか女の子がそんなこと言うな!!! なんで今の流れからそうなるんだ!」

ずっとアドルバードの側にいたレイは、貞操という言葉一つでかなり動揺している主人を見て若干情けなくなった。気づかれないようにはあ、とため息を零す。

「関係あるのよ。でもアドルは私のお願い聞いてくれないんだもんね、関係ないのよね、私言わなくてもいいのよね」

「わ、分かったよ! 何でもするから泣くなっ!」

そう言った直後のリノルアースの顔を、アドルバードは一生忘れないだろう。

「ありがとう。お兄様。だから大好きよ」

にっこりと、それは可憐で美しい、黒い微笑みだった。

第2話：男に一言はないわよね？

リノルアースの行動は早かった。

「じゃあ、アドル。これ着て」

「は？」

アドルバードの反応が遅れてしまったのも無理はなかった。着てと言いながらリノルアースが差し出してきたのは、ピンクのひらひらのドレスだったのだから。

「着てつて……これどうみてもドレスなんだけど」

「そうよ、どこからどうみてもドレスよ。角度変えてみても意味ないから止めなさい、アドル。私のそんなに気に入ってないドレスだから汚したっていいわ。練習よ、練習」

そう言いながらリノルアースはアドルバードの上着を剥ぎ取ろうとし始める。お姫様がこんなことしちゃいけないと思うのは俺だけなのだろうか、とアドルバードは慌てて抵抗した。

「ちよつと待て！ 事情を説明しろよ！ なんで俺がドレスを着る必要があつておまえの身が危険なのかをだな」

「飲み込み遅いのね、アドルつてば。それじゃあ良い王様にはなれないわよ？」

ふう、とため息を吐き出しながらリノルアースは憐れむような目で見てくる。何がどうしてそんな顔をされなくてはいけないのか。

「レイ。剥いじゃつて」

「はい」

ぱちん、とリノルアースが指をならすと、それまで静観していたレイが素早く動き出す。

「ちよつ……レイ！ おまえの主人は俺だろうが！ なんでリノルの言うこと聞いているんだよ！」

「これもリノル様のお願いですから。アドル様がほいほいリノル様にのせられるのがいけないんです」

正論と言えば正論かもしれない。レイとアドルバードでは体格差があるので、どれだけ抵抗しても大型犬に対して小型犬が吠えているような空しさしかなかった。

「こら！　だ、だからっっておまえ、服を奪うな！」

長身のレイにあっさりと上着を奪われる。

上着だけならいいが、ドレスを着るといふのだから服は全て剥ぎ取られるに決まっている。まさか年頃の妹の前で生着替えをしるというのか。

「もう、じれったいわね。レイ！　手伝って！」

リノルアースがしびれを切らして自分の騎士にまでアドルバードの服を剥ぎ取るように命令する。レイはレイの弟だが、性格がまるで違うのでずっとアドルバードを憐れむように見ていた。

「リ、リノル様。いくらなんでも事情も説明していないのにあんまりじゃあ……」

控えめに、レイがリノルアースに意見すると、リノルアースはきつとレイを睨みつけてきた。

「レイ、減給されなくなったらとつととしなさい」

「はい」

そこで碎ける騎士道か、とアドルバードは肩を落とす。わずかに希望が見えただけに落胆は大きい。

「すみません。アドル様。姫には逆らえませんが……」

レイと一緒にアドルバードの服を剥ぎ取りながら、レイが目には涙を浮かべながら謝罪する。これから女装させられるアドルバードが不憫でたまらないのだろう。

「　　気にするな、レイ。こんな妹を持ってしまったのが不運だった。素直に着替えるから無理やり脱がせるのは止めてくれ、レイ」

今度は忠実にアドルバードの言葉に従うレイ。一体どつちの味方なんだか、とアドルバードはため息を吐く。

「リノルは向こうに行ってる！　女の子が男の裸を見るんじゃありません！」

アドルバードがしっし、とリノルアースに外に出るように言っと、つまらなそうな顔をして呟く。

「双子の兄の裸見てもときめかないわよ」

「ときめくときめかないの問題じゃなくて淑女としての常識だ」

むう、としながらリノルアースが回れ右して扉に向かう。しかし

「だったらレイも出なくちゃ駄目なんじゃないの？ レイだって女の子でしょう」

と、リノルアースが扉の前で、聞こえるように呟く。

「そういえばそうですね」

本人も忘れていたかのようにのんびりと呟いた。

アドルバードの専属騎士であるレイは正真正銘、女性だ。しかし綺麗な銀髪は男性のように短く切られてしまっているし、顔立ちも中性的で、騎士の制服を着ていると男に見える。背も女性としては高めだ。

「い、いや。レイがいなくなるとこれどうやって着るのか分からないから」

大体、彼女はいつもアドルバードの着替えを手伝っているのだから、今更だった。

アドルバードがレイを女扱いしていないとかそういうことはなく、むしろ女性として扱われることはレイが嫌がる。女性の騎士、という点でいろんな経験をしてきているということをアドルも知っている。

「リノル様、コルセットも貸していただけますか」

レイはさほど気にした様子もなく、当然のごとく脱いだアドルバードの服を畳みながら扉の前でふてくされるリノルアースに話しかける。

「クローゼットの中よ。ちょっと待ってて。あと靴もそのままじゃ駄目よね？ でもサイズがないわ」

結局アドルバードが着替え終わるまでリノルアースは部屋に居座

った。

着替える途中の羞恥心は無いに等しいが、着替え終わった方が拷問だった。レイに容赦なく締め付けられたコルセットで窒息死しそうだし、足にまとわりつくドレスは暑苦しい。

「完璧だわ、アドル！ どこからどうみてもお姫様！」

「ご丁寧に用意されていた鬘をかぶせられ、男心に傷をつけるようなひらひらふりふりのピンクのドレスを着せられたアドルバードは、見事に姫に変身していた。

「こんな感じで女装して、私の代わりにアルシザスに行ってくれない？」

「は？」

にっこりと笑うリノルアースを前に、アドルバードは自分の耳を疑った。

「リ、リノル。今なんて言った？」

「女装して、私の代わりにリノルアース姫としてアルシザス王国に行ってきたって言ったのよ」

単語を補いながらリノルアースはもう一度事情を説明する。

アドルバードはリノルアースの言葉を何度も反復しながら、意味を考えた。シヨックのあまりに脳が機能していないのかもしれない。

「なんでっ!？」

十分に時間を使って、やっと理解したアドルバードは叫んだ。

「ちよつとね、求婚されちゃったわけだね」

「はあ!？」

「遠まわしによ、正式にはされていないの。でも相手は大陸屈指の強国。こっちは弱小国よ。相手からすれば虫けらみたいなもんよ。しかも遊びに来ませんか、なんて手紙まできちゃってるのよ」

優雅に紅茶を飲みながらリノルアースは毒づく。見ているだけでは十分な目の保養なのに、とアドルバードは悲しくなった。クールな印象のあるレイにしろ、見た目だけは可憐なりノルアースにしろ、見た目の良い女は中身に問題があるのかもしれない。

「それで？」

「国士のいざごぜにはしたくないでしょう？ アドルにはアルシザスの招待を受けて、丁寧かつ正確に、害虫駆除してきてほしいの」
アドルバードは頭を抱えた。

ただの女装だとは思わなかったが、そんな大事なんて。

「害虫くらい自分でどうにかしたらどうだ？ できるだろ」

「だからそこで貞操の危機が出てくるんじゃないの。ロクデナシの国王だって聞くからもしもってことがあるかもしれないじゃない。それに私が行ったら相手の顔面殴って外交問題作っちゃうわ」

可能性としては後者の方が高い気がする。なんと行っててもこの姫は国王を害虫やらロクデナシ呼ばわりするほどの強者だ。

「男に二言はないわよね？ アドル」
にっこり。

「……嫌とは言わせないんだろ」
「もちろん」

この妹に逆らう気はもちろんない。

アドルバードは仕方なくリノルアースの『お願い』を聞いてしまったのだった。

第3話：あなたは私が守ります

ふて腐れたまま馬車に揺られ、遠いアルシザスを目指す旅路に出た頃には、リノルアースの願いを聞いてから一ヶ月が経とうとしていた。その一ヶ月の間でアドルバード専用のドレスが仕立てられ、ハイヒールが用意され、憎いことに専用のコルセットも作られた。職人たちが涙するほどの急務であったことは間違ない。

その指揮をとったのはもちろんリノルアースだ。率先してあれこれと注文をつけ、動き回っていた。そんなに頑張るならおまえが行けと、何度言いたくなったことが。

「もう出発しているんですよ、アドル様。いいかげんに諦めてください」

「……おまえ本当に誰の味方なんだ」

「私の主人は世界にただ一人だと思っていましたが、違いましたか」
その主人に女装させるか、おまえは。

内心毒づきながらも、少し嬉しくて頬が緩んだ。こういうことをさらりと言ってしまうレイは凄いと思う。

彼女は今十七歳だ。本当ならとくにどこかの貴族と結婚しているだろうに、彼女は騎士としてアドルバードの側にいる。これから先も、おそらく彼女は自分から結婚しようとはしないだろう。

「主人に女装させる騎士が世界に何人いるだろうな」

「これほど女装が似合う主人は世界にどれくらいいるんでしょうね」
嬉しいなんて思ったことを誤魔化そうと厭味を言えば、それ以上の厭味でかえってきた。口でも剣の腕でも、レイに勝てる気がしない。

「俺だつてあと何年かすればもう少し男らしく……」

「なれればいいですね」

「なれっこないと思ってるだろ」

「いいえ、まさか」

レイを睨みつけても、彼女は真面目な顔をしているだけだ。本当に表情から何を考えているか分かりにくい。これでも小さな頃から付き合いだから、他の人よりは理解できているとは思うが……。「もうすぐで着きますよ、覚悟を決めてくださいね。間違ってもいつもの口調で話したりしないように。ついでに言えば本物のように振舞っても駄目ですよ。リノル様のマネなんかしたらアドル様が来た意味がありません」

無理難題を言う。

「……手本がないのに、どうやって振りをしると」

「理想のリノル様でも思い浮かべてください。見た目はあのまま可憐で、大人しくて淑やかで、控えめなりノル様です」

そんな妹だったらこんな苦労しないのになあ、と思っても無いものねだりというものか。

むしろそんなに可愛い妹だったらこれくらいの苦労はしてもいいと思うかもしれない。ロクデナシの国王のもとになんかやったら大変だ。

「……………レイ」

「なんですか」

「想像力に限界がある。あのリノルが淑やかなんで……無理だ、考えてもすぐに崩壊する」

邪気のない優しい微笑みを浮かべているリノルアースが次の瞬間には「お願い」と言いながらあの恐ろしい黒い笑顔に変わってしまう。

「……とりあえず普通の姫のように振舞えばいいんですよ」

「普通の姫と言われても。俺の近くにいる姫はリノルだし」

「あれが普通だとは思わないでしょう。この際アドル様の好みの姫を演じてくださればいいです」

剣を腰にぶら下げると？

と、思わず言いそうになってしまった。レイに限って、アドルの密かな想いに気づいていないはずがない。今の発言にはどうせ深い

意味はないのだろう。

「アドル様、王都に入りましたよ」

「長かったなあ、馬車での移動」

「ええ、あと少しの辛抱です。もうすぐで王城も見えてきますよ。大丈夫ですか？」

レイが少しだけ心配そうに見つめてきた。アドルバードはこほん、とわざとらしく咳をして。

「もちろん。大丈夫よ。心配しないで、レイ」

にっこりと微笑みながら、想像上のリノルアースを演じた。ふわりと花も綻びそうな美しい微笑みに、レイもわずかに微笑んだ。

「それは良かった。では練習です。城に着くまではそのまま。私も今からリノルアース様とお呼びしますので」

「うえ。それはちよつと……」

アドルバードが抗議すると、レイは真面目な顔で返す。

「これから五日間は常にそういう状態なんですから、慣れる必要があるでしょう」

「部屋でもリノルのふりをしろと？」

それではストレスが溜まって死んでしまう。

「それが望ましいことですけどね。アルシザスの者にバレると面倒なので。完璧な振る舞いを徹底しろなんてひどいことはいけませんよ」

「……やっぱ無理な気がしてきた」

こんな女装じゃあすぐに男だつてバレて、国際問題になるんじゃないだろうか。でもそのときは悪いのは仕組んだりリノルアースで、自分じゃないと言い張ろう。主張したところで無駄かもしれないが、はあ、と重いため息を肺から出すと、少しは楽になる気がする。

「大丈夫ですよ、そう簡単にはばれません。今日はとりあえず挨拶して、あつても晩餐会くらいでしょう。それなら間近までは近寄ってきませんから」

「まあ、会ったばかりで口説いてきたりはしないだろうけど」

「それは私では保証できませんが」

嘘を言わないのはレイの性格だが、ここは気休めでもいいから保証してくれ。また一つため息を吐き出し、アドルバードは肩を落とす。

「大丈夫ですよ」

レイがかすかに微笑みながら、そう言う。

「あなたは私が守ります。それが私の仕事ですから」

これが、女装のお姫様と男装の騎士なんかじゃなくて、本物のお姫様と騎士だったのなら、これ以上に盛り上がる言葉はないのだからうけれど。

守らねたいわけじゃ、ないんだよなあ。

それは彼女の存在意義を奪う言葉であるし、事実として彼女の方が強いんだけど。惚れた女に守られるような男ではありたくない。しかし残念ながらアルシザスではアドルバードはリノルアースというお姫様役で、レイは女性であることを隠すという。性別が見事に二人とも逆転するというわけだ。

「頼りにしてるよ」

それもまた事実だ。

アドルバードは苦笑いを浮かべながら、複雑な心境を、なんでもお見通しの騎士から少しだけでも隠そうとした。

第4話：アルシザスによるこそ

むわりと暑い風が肌を、髪を、撫でる。不快なそれは、アドルバードの機嫌をますます悪化させていた。眉間に皺を寄せていると、レイが「アドル様」と誰にも聞こえないような小さな声でアドルバードをたしなめた。

大丈夫だよ、と何も言わずに笑って、ふう、と息を吐き出した。敵は目の前だ。

贅を尽くした謁見の間に一步足を踏み入れると、アドルバードは背筋を伸ばし、胸を張り、理想の「リノルアース姫」となった。

「ハウゼンランドより参りました、リノルアース・ルイブルク・アルト・ハウゼンランドと申します」

薄い桃色のドレスの裾をつまみながら、リノルアースになりきっているアドルバードは優雅に礼をする。声はいつもより高めに、目は節目がちに、と自分に言い聞かせ、とにかく深窓の儂い姫を演じていた。

数歩下がったところにはレイが控え、片膝をついている。彼女の身体の曲線を隠すようにデザインされた服は濃紺で、服についている少ない装飾は全て銀だ。彼女の容姿を引き立てつつも、目立ちすぎない。アドルバードの着る薄桃色のドレスは、飾り付けは全て金だ。金と銀。それはまるで初めからついの存在であったかのようだ。ほう、と誰かが息を呑むのが聞こえた。

アルシザス国王・カルヴァに挨拶するために現れた姫君と、その忠実な騎士は一枚の絵とも思えるほどに美しかった。

「アルシザスによろこそ、北の国の麗しき姫」

「ちらり、とアドルバードはアルシザス国王を盗み見た。南国アルシザスの民の特徴と同じ、黒い髪に、褐色の肌。身体の引き締まった、二十代後半の男性。瞳は穏やかそうにも鋭そうにも見える。」

「ぜひこの国を気に入っていただけると嬉しいものです。ハウゼンランドとは違った、様々なものがありますので」

「うちの国が弱小国だっという厭味か。アドルバードは内心ではそう毒づきながらも、顔はにっこりと微笑んで、カルヴァを見る。」

「北国のハウゼンランドと、南国のアルシザス、違うところはたくさんあるでしょう。ここで多くのことを学び、我が国に役立てることができればと思います」

「つまりは、ここに長いする気はない。おまえと結婚して定住する気もさらさらないと、いう意味を込めて言い返す。」

「こんなに蒸し暑い国で暮らすなんてまっぴらだ。今頃のハウゼンランドは短い夏を迎えて、涼やかな風が吹いているだろうに。慣れない暑さのせいか、はたまた胸を締め付けるコルセットのせいか、さつきからずつと頭痛がするのだ。」

その後当たり前障りのない会話をして、その場を去る。

「そもそもアドルバードよりも短気なりノルアースが、こんなに暑いところになんて住めるわけがない。一日に何回癩癩を起こすか分かったもんじゃない。」

「美しい姫に、美しい騎士。目の保養とはまさにこのことですな。」

「そちらの騎士、名は何と言っ」

「カルヴァは上機嫌で跪いたままのレイに問う。」

「レイ・バウアーと申します」

「凜とした声がある場に響いた。レイは俯いたままであるはずなのに、不思議なほどにその声は遠くまで届く。」

「レイ・バウアーか。覚えておこう。リノルアース姫、どうでしょう、今からでも我が城の中を案内したいと存じますが」

「友好的といえば聞こえはいいが、あまりにも軽薄で突然な誘いに、」

アドルバードは顔を顰めそうになった。咄嗟に笑顔の仮面を被ることができたのは上出来だっただろう。

「失礼を承知で申し上げます。我が姫君におかれましては、慣れぬ長旅と南国の気候で体調が芳しくありません。せつかくの陛下の御心遣いではありますが、今は疲れを癒させてはいただけませんでしょうか」

傍目には明らかに無礼なレイの割り込みではあったが、カルヴァは気にする様子もなく頷いた。

「これは気がつかなかった。部屋を用意してあります、どうぞ姫はごゆるりとお休みください」

「ありがとうございます。お言葉に甘えて今日はこれにて失礼させていただきます」

儂げに微笑み、来た時と同じように優雅に礼をする。小さく「レイ」と騎士の名を呼ぶと、忠実な騎士は体調の優れない主に手を差し出し、丁重にエスコートした。ほう、と周囲の人々はため息を零して二人の背中を見送るのだった。

用意された部屋に戻り、あれこれと世話をしようとするアルシザスの女官を下がらせた。ハウゼンランドからも女官や侍女を連れて来ているのだが、アルシザスでも多くの女官がリノルアース姫の世話をするために待ちかまえていたのだ。

「リノル様、これで頭を冷やしてください」

「そんなことを言われるようなことはまだやってないと思うが既に用意していたのかと問いたくなるくらいにちょうどいいタイミングで、レイは濡らしたタオルを差し出した。表立って問題になるような発言はしていない。

「いえ、そういうことではなく。その方が楽になりますから。暑くて辛いんでしょう？」

「辛いというかダルイ。頭痛いし」

「ですからタオルで冷やしてください。あと首筋を冷やせば……」
そう言いながらレイがもう一枚のタオルを首筋に当てた。ひやりと、心地よい冷たさと共に少しだけ全身が冷える。

「あ……気持ち良い」

「リノル様、今は少し多めに見ますが言葉遣いには気をつけてくださいね」

長椅子にもたれかかり、すっかり地で話しているアドルバードにレイが注意する。

「部屋の中でもか？」

「念には念を、という言葉がありますから。しばらくは」

「わかった」

やると決めた以上はばれるわけにはいかない。

バレたら最後、ハウゼンランドの王子には女装趣味があるなんて噂がたつかもめない。それはさすがにごめんだ。ごめんだというよりも大問題だ。なにしろアドルバードはハウゼンランドの後継ぎなのだから。

「とりあえずは丁寧かつ遠まわしに求婚を断って、少し釘を刺しておけばいいだろ」

「リノル様」

レイが声を低くする。口調を直せ、と目が語っている。アドルバードはため息を零し、さきほどの言葉を言い直す。

「とりあえずは丁寧かつ遠まわしに求婚をお断りして、少し釘を刺しておけばいいわね、レイ？」

「っこりと美しい微笑みを浮かべて首を傾げる。自分でも可愛らしい姫君の動作だっただろうと思う。」

「そうですね」

主人が女言葉で話しかけても動じない騎士は果たして優秀なのだろうか。

そんなことを考えつつ、アドルバードは滞在中の作戦を練り始め

るのだった。

第5話：では腹の探りあいに行きますよ

丁寧にかつ遠まわしに求婚を断る。そう決めたのはいいものの。それはなかなか難しい問題だった。

何しろ相手は大陸の中でも屈指の大国の国王。こちらは地図上でも小さくて他の国と大差のない小国の姫君　ということになっている。

「どおーすればいいいいー」

唸りながら頭を抱えるアドルバードを見て、レイがため息を吐く。

「リノル様」

「あーっ！　もう分かってる！　言葉遣いを直せっていうんだろー！？」

「言われる前に直してください」

小姑め、とアドルバードは呟く。

挨拶の場で早めに退出できたのは僥倖だったが、予想通り今晚にはリノルアース姫のための晩餐会が開かれることになっている。ごく少数で、つまりはリノルアースとレイ、アルシザス国王カルヴァと少しの重鎮、といったところだろうか。

刻一刻と時は過ぎ、太陽はもう西の海に沈もうとしている。空はだんだんと暗くなってもはや夜は待たずともやってくる。

「アルシザス国王のお人柄が分からない以上、なんとも言えませんね。リノル様のおっしゃっていたようにろくでなしなら話は早いんですが」

「……間違っても斬るなよ」

「あなたに危険がない限りは斬りません」

俺が襲われたら斬るのか。一国の国王を。

本気なのか冗談なのか分からないが、つまりは自分が危険な目に遭わなければいいのだ。一国の国王に剣を向けただけで十分な外交問題に発展してしまう。ふう、とため息を吐き出してアドルバード

は自分の心の中に書きとめておいた。

「とにかく、様子を見た方が良いと思います」

そう言いながらレイがアドルバードに冷たいタオルを手渡す。もう日も暮れ始めているというのに、暑い。蒸し暑い。湿気が多いのかじめじめとしているし、天然の蒸し風呂にでも入っているようだ。

「しかたない。今日で相手を見極めよう。作戦はそれからだ」

方針はさつさと決めておくに限る。アドルバードは決意すると、気合いをいれるように両頬を軽く叩いた。暑さでぼんやりとしていた頭が少しすっきりとした。

「ええ、では腹の探りあいに行きますよ、リノルアース様」

すっと立ち上がったレイがアドルバードに手を差し出す。

本来の性別ならアドルバードがするはずの行為だが、彼女がするほうが様になっているのだから悲しい。練習したとはいえ、まだ慣れないドレスを着ているときはレイにエスコートしてもらった方が楽なのも事実だ。

アドルバードはため息を飲み込み、レイの手をとり立ち上がった。まだまだ何もかも始まったばかりなのだ。

「本当に、噂に違わぬ美しさでありますな、リノルアース姫は」

少し酒も入り、上機嫌で国王カルヴァは言う。

本物じゃないんだけどな、と内心で思う。男が男に美しいと褒められても嬉しいはずがない。アドルバードは苦笑いを浮かべながらありがとうございます、とだけ返した。

ハウゼンランドの者はアドルバードとレイ、そして外交官が一人アルシザスも国王の他に宰相と国王の秘書がついているくらいだ。

「どうですか、この国は」

宰相に話しかけられて、アドルバードが困惑する。ここで良い反応をすれば面倒なことになりそうだし、しかし悪いことを言うわけ

にもいけない。そもそも到着してからこの国の良いところなどひとつも見つけられないのだが。暑くて暑くてうんざりするだけだ。

「そうですね、来たばかりなのでまだよくは分かりませんが……我が国と随分と気候が違っているので、戸惑っています。アルシザスはいつもこのように暑いのですか？」

「つこりと微笑みながら当たり障りないことを言っていれば問題ないだろう、とアドルバードは可愛らしい姫を演じる。

「今は夏ですからね、姫はお辛いでしよう。秋になれば少しは涼しくなりますが、ハウゼンランドに比べればどの季節も暑く感じるでしょうな」

「ハウゼンランドにいらっしやったことが？」

レイが機転を利かせて話を変える。

本来ただの騎士ならば同席することはありえないだろうが、姫の専属の騎士というだけでかなりの特権が得られる。レイは外交官と肩を並べられるほどの地位にはあるのだ。

「小さい頃に、一度。冬に行ったので印象はかなり強烈ですね。雪で溢れていて」

「ハウゼンランドの冬は長いですから」

宰相の話にあわせながらアドルバードは顔に張り付いたように笑顔のまま食事を続けた。北国であることもあるが、ハウゼンランドには大きな山脈があるのでその分他の国よりも雪が深い。

「寒かったのは事実ですが、雪が止んだ後のあの銀世界は見事です。アルシザスでは見られない美しい景色でした」

「まあ、ありがとうございます。そう言っていただけでも嬉しいです。ハウゼンランドはアルシザスには遠く及ばないほどの小さな国ですから」

アドルバードは宰相に微笑みかけながら、国王を見る。

「こう言っておけば恐れ多くて求婚は受け入れられませんと断ることも可能だろう。」

「いやいや、国の大小は関係ありませんよ、リノルアース姫。美し

きものにはそれだけの価値があるものです」

う、とアドルバードが言葉に詰まる。うまく言い返された。

「国王陛下は美しいものがお好きなようですね」

即座に答えられなかったアドルバードに代わって、レイが再び助け舟を出す。

「もちろん、美しいものは人類の宝とも言えるだろう。騎士殿と姫が並ぶと本当に絵画でも見ているような気分になりますよ」

「ご冗談を」

くす、とレイがかすかに笑う。

珍しいものも見れるものだと思いつながらアドルバードは心の中でレイに感謝した。職務中のレイはほとんど笑わないのだ。幼い頃から一緒にいるアドルバードは何度も見たことのある笑顔だが、騎士団の男たちはレイが微笑むだけでとても驚く。

「それにしても、お若いのに、もう姫に剣の誓いを立てるとは……迷われることはなかったのですかね」

宰相が感心したようにレイに問うた。剣の誓いとは　この大陸ではどの国にもある、騎士と王族または貴族の誓いだ。しかし今では随分と誓いをたてる騎士も減っている。

普通の騎士は己の信念を持って、国のため、民のために剣を振るう。その騎士が剣の誓いをたてるということは、ただ一人の主人に一生仕え、その身を捧げるといふものだ。その忠誠を受け入れられなければ、ただの騎士に戻ることはできない。今ではないが、昔は忠誠を受け入れられなかった騎士は死ぬことになっていたのだ。その意識が残っている今でも、剣の誓いをたてるということは相当の覚悟のいる行為だった。

レイは顔色を変えずに即答した。

「迷いなどありません」

きつぱりとした返答に、アドルバードだけではなく、その場にいた者の胸が打たれる。言葉に無駄な飾りが無いぶん、より真実味があつた。

アドルバードがレイの言葉に浮かれていると、晩餐会はすぐに終わった。

いろいろな感情がごちゃ混ぜになって、あまり味わったことのない異国の料理の味もあまり覚えていない。

第6話：あれはロクデナシだ

晩餐会も終わり、ようやく一息ついた頃だった。

夜もまだ浅く、満月が輝いていて外は明るい。星は今夜だけは大人しく、満月に主役を譲っている。ハウゼンランドは空気が澄んでいるので星がとても綺麗に見えるのだが、アルシザスではそうでもないらしい。

「さ、散歩ですか？」

思わず作り笑顔も崩れる。部屋にアルシザスの侍女がやってきて、国王からの言付けをアドルバードに告げたのだ。

「はい。交流を深めるためにも、この国をより良く知っていただくためにも、姫を中庭をご案内しながらお話したいと」

危険だろう、それは。と、という言葉が口から漏れそうになったが、寸前のところで飲み込む。

「申し訳ありませんが、婚約前の姫が夜に男性にお会いするのは…明日、昼間ならば喜んでお受けいたしますが」

困惑するアドルバードの隣に立つレイが、代わりに答える。

「お誘いは本当に光栄です。ですがあらぬ誤解を受けぬためにもご理解ください。明日、楽しみにしていますと、お伝えください」

レイがかすかに微笑むと、侍女はほんの少し頬を赤く染めてかしくまりました、と頭を下げて小走りです去っていく。

「レイ」

「なんですか」

扉を閉め、二人きりとなった部屋の中でアドルバードは決定した。

「あれはロクデナシだ」

「……そのようですね」

普通に、一般的に、常識的に考えて、未婚の姫を夜に連れ歩くなんて考えられない。それが舞踏会などの日ならまだまじだが、今日は違う。まして「リノルアース姫」は今日アルシザスに到着したば

かりだ。その姫にそんな誘いをする国王が、まともなはずがない。

「夜に中庭で散歩!? そんなことはお暑い恋人同士がするもんだろぅが!! なんか勘違いしてんじやないだらうなああの野郎!」

「落ち着いてください、どうにかなっただんですから」

「どうにかって……明日に先延ばしただけだらうが!」

「明日の昼間になっただけでも十分です。私も側に控えていますし、周囲の目もありますから」

冷静なレイとは違って、アドルバードの不安は拭いきれなかった。

「万が一、男だつてばれたら……」

「それはありえませんが大丈夫です」

きつぱりと迷いなく言い切る騎士に、アドルバードは悲しくなつた。自然と声も小さくなる。

「俺はそんなに疑いようないくらいに女に見えるのか?」

「前にも申し上げましたように、見事な姫君でいらつしゃいます」

惚れた女にそう言われる男はこの世にどれほどいるだらうか。アドルバードは肩を落とし、早々にふて寝をするためにベットに潜り込むのだった。

「おはようございます、アドルバード様。今日も見事なお姫様っぷりですね」

にこにこ上機嫌で、こっちの機嫌が悪くなるようなことを言うのはハウゼンランドから共にきた侍女だ。

彼女らに悪気はないのだが、嬉々としてアドルバードを飾り立てているので楽しんでるふしはある。

「ニーナ。ここではリノル様と呼ぶようになっています」

「あ、すみません。つい」

レイの注意に素直に謝りながらも、次にはまた忘れているのだ。どこか抜けているところがあるので仕方ない。

「リノル様、もし何かされそうになつたら殴つたりしないで悲鳴を

あげるんですよ。そうすればすぐにレイ様が駆けつけてくださいますからね」

例の散歩に行こうとするアドルバードを引き止め、侍女一同、真剣な顔でアドルバードの手を強く握る。

「……そんなことしたりしないわ、大丈夫よ」

本物のリノルアースじゃあるまいし、そういった問題を起こさなためにアドルバードがこんなことをしているのだ。にっこりとお姫様の微笑みを浮かべながら答えるアドルバードに、侍女達は涙を浮かべる。人の女装を楽しんだり憐れんだり忙しい連中だ。

昼間ということもあって、かなり暑い。

それなのに中庭なんかを歩かなければならないのだから災難だ。

普通の姫と違って（本来は姫ではないし）中庭の珍しい南国の花に興味はない。

「これはリノルアース姫。わざわざありがとうございます」

中庭で待っていたカルヴァアがにこやかに歩み寄って来る。

「陛下からのお誘い、とても光栄です。昨夜は申し訳ありませんでした」

「いやいや、こちらの気遣いが至らなかったのですよ。では騎士殿。エスコート役は私が」

そう言いながらカルヴァアは半ば無理やりにアドルバードの手を取る。

「中庭にいるので護衛は無用だ。騎士殿も少しは休まれた方が良い」
俺とレイを引き離して二人きりになりたいのか。

アドルバードはロクデナシという印象を変えることはできなさそうだと思いつつ、レイを見る。ここで無理にレイが同行するわけにはいかないだろう。

「何かあれば、すぐに呼んでください。見えない程度の距離で追いますから」

耳元でそう囁かれる。

カルヴァアには聞こえたのか聞こえなかったのか、確かめる術はな

いものの、声量からして聞こえてはいないはずだ。

「では陛下、失礼します」

レイは優雅にお辞儀すると、とりあえずその場を辞す。その姿を名残惜しそうに見送った後で、アドルバードとカルヴァアは中庭の散策を始めた。

あちらこちらに咲き乱れる花の甘い香りが鼻腔をくすぐる。ハウゼンランドとは違って、大輪の明るい色の花が多い気がする。頬をかすめる風は生暖かく、身体を冷やしてはくれない。照りつける太陽の明かりで少し眩暈がするくらいだ。

「姫は、騎士殿を信頼しているようですね」

静かだったカルヴァアが突然口を開いたかと思えば、レイの話だ。

「え、ええ。もちろんです。私に剣の誓いを立ててくれた、大切な騎士ですから」

「そういう意味だけでもなさそうだ」

にやりと、意地悪そうな笑みを浮かべてカルヴァアがアドルバードを見つめる。

「分かりませんわ、どういうことかしら？」

につこりと微笑み返してどうにかかわそうと試みるが、カルヴァアはそれを許してくれそうにない。

「あなたが騎士殿を見ているときの目はまさに恋する乙女のようにすがね。違いますか？」

ここまで直球で聞かれたら、どう答えればいいのか分からない。誤魔化しきれぬだろうか、それとも。なんと言えばいいだろうかと思案するアドルバードの視界が、ぐらりと揺れた。頭が回る。直立するのも不可能なほどに、眩暈がする。

「リノルアース姫!？」

すぐ側なのか、それとも遠くからか、カルヴァアの声がした。

吐き気がする。なんなのかこれは。

「ア……リノル様!」

意識を失う寸前、細い腕に抱きとめられた。

目を閉じる前に見た騎士の姿に、ほっと安堵する。

「……レ、イ……」

側にいると分かっていた。

呼ばなくても来てくれるだろうと思っていた。

それは信頼などという言葉では表せ尽くせない、不思議な感覚だった。

第7話：私は女好きだからな

アドルバードが気を失ったのは、そう長い時間ではないようだった。日差しは変わらず強いまま、生暖かい風は頬をかすめていく。

「目が覚めましたか」

目を開けるとすぐにレイの顔が見えた。少しほっと安堵したような、そんな顔だ。心配をかけたかな、と少し申し訳なくなる。

「えーと……」

「熱中症ですよ。暑さに慣れてないのもあったんでしょう。倒れたのは覚えてますか？」

「そうだ、国王と話している最中に眩暈やら吐き気がして、暗転したんだ。」

「なんとなく」

「とりあえず、飲んでください」

そう言いながらレイが冷えたレモン水を差し出す。素直にアドルバードが一口飲むと、喉が潤うのと共に身体が冷え、心地よい。

「それで？」

突然声が聞こえて、アドルバードは跳ね上がった。気がつけばすぐそこには国王カルヴァが腕を組んで立っていた。

「へ、陛下」

「具合は大丈夫かね、アドルバード王子」

「ええ、もう平気です……… つつてえええ！？」

「ごく自然に自分の本名を言ったので、アドルバードも普通に返事してしまいました。」

「ばれてしまいました、アドル様」

レイがいたって冷静にそう説明する。

いや、言わなくてもそんなこと分かる。

「どうということなのか説明していただきたい。なぜ王子が姫のふりをして我が国にやって来たのか」

カルヴァの顔は真剣そのものだ。騙されていたのだから当然だろう。

「な、なんで」

絶対にばれないって言ったくせに、という意味を込めてレイを見る。

「騎士殿は悪くない。男と女くらい触れば分かる」

「どこ触った!!」

「普通に骨格で分かると言っているのだよ。完全に倒れた時は騎士殿が駆けつけてきたが、その寸前は私が抱きとめたのでね」

骨格で分かるもんだろつか、と疑問を抱きながらアドルバードはカルヴァを見た。

視線に気づいたカルヴァは胸を張って言う。

「私は女好きだからな」

「……はあ」

妙に納得というか。自信満々にそう言われてしまうと何だか脱力してしまう。

「いや、見た目だけは完璧だがね。すっかり騙されてしまうところだった」

「あんまり嬉しくないんですけど、それ」

皆褒めているつもりなのだろうか。

アドルバードが横になっていたのは中庭にある東屋だった。すぐそこには池もあるし、周りの木々が日陰を作っているので思いのほか涼しい。

「まずは謝罪を。申し訳ありません。国王陛下」

ばれてしまった以上、説明する他に方法はない。

「過ぎたことだ。あまり気にしてはいない。目の保養になったのは男でも変わらないことであるし」

「そうですね……」

女装でもいいのか、というつつこみは喉の奥にしまいこんで、アドルバードは暑いかつらを取った。

「改めまして、アドルバード・ライオニア・アルト・ハウゼンランドと申します。この度は妹リノルアースに代わり、アルシザスへと参りました」

ふむ、とカルヴァが頷く。

「リノルアース姫が訪問しなかったのには訳があるのだろうか？ アドルバード王子、あまり堅苦しくならなくていい。ここには気にしなけばならない周囲の目はないわけだし」

「それもまあ、そうですね。簡単に言うそうですね、リノルのワガママなんです」

アドルバードの隣でレイが頭を押さえた。

カルヴァも目を丸くしている。

「ワガママ？」

「そう、ワガママ。陛下から遠まわしに求婚された、と相談されました。まああれが相談というのであればですけど」

「アドル様」

あまりにも砕けた説明を始めた主人を、レイは見かねて止めようとした。

「レイ。回りくどい説明は時間の無駄だろう」

「そうだ、騎士殿。気にしなくて良い」

カルヴァからもそう言われてしまえば、レイも引き下がるしかない。黙ってアドルバードの隣に控えた。

「確かに遠まわしにだが求婚はしたな。それが迷惑だったというわけかな？」

「それは俺には分かりませんよ。でもまあ、まだ十五歳で、見知らぬ相手から求婚されて困惑したのは確かだと思います。でも正式なものでもないのだから断ることはできないし、国に招待までされていたので」

「少々強引すぎたか」

カルヴァが苦笑しながら答える。アドルバードを向かい合うようにして座るカルヴァの表情を伺いながら、話を続けた。

「兄の俺が言うのもあれですけど……リノルはちょっと策略家っていうか、使えるものは親だろうがなんだろうがこき使う子で。今回も格好の獲物がいたんですよ」

「それが君か、アドルバード王子」

こくり、と頷いてアドルバードが続ける。

「双子でそれなりに似てますからね。このとおり女顔だし。両親もリノルにはベタ甘で」

「そうおっしゃるアドル様も立派な兄馬鹿ですが」

隣に立つレイが補足する。否定できないのが恥ずかしい。

「苦労しているようだな」

カルヴァにまで憐れむように見つめられ、情けないのやら悲しいのやら分らない、複雑な感情になる。

「今回のことはきちんと断れなかった俺にも非はあります。求婚のお返事はリノルに手紙なりなんなりで答えさせます。本当に申し訳ありません」

そう言いながら頭を下げるアドルバードに、カルヴァは気にするなと声をかける。

「もとより美少女と噂のリノルアース姫を見てみたかっただけなのだ。求婚の話も半分以上冗談だしな！」

いや、だからそれ胸張って言うことじゃないし。

つつこみたいところが山ほどあるが、アドルバードは寛大な心でそれらを飲み込む。

「今回はとりあえず何の問題もなく、予定通りに事を進めようではないか。君は女装を続けて、リノルアース姫として帰国するまで過ごす。目の保養にはなることだし、まあそれで良いだろう」

「良いんですか、それで」

「うむ。美しいものは人類の宝だからな！」

またもカルヴァは胸を張って堂々と言う。

こつという性格だったのか、と半ば呆れつつ、カルヴァの温情に甘えることにしよう。

「こつという顔で生まれてきたことをこのときほど良かったと思ったことはないよ」

美少女といっても過言ではないこの顔がコンプレックスだったのだが、今回はそれで救われた。

「それは良かったですね」

そう答えるレイを、アドルバードは見上げた。

レイが女だということは、まだカルヴァにはばれていないのだろうか……？

一抹の不安がよぎる。女だと気づいたら速攻で口説き始めるに違いない。レイが口説き落とされるということはないにしろ、それは嫌な光景だ。

違う作戦を立てなくてはならないのか、とアドルバードはため息を吐き出す。

なんといつでも相手は触ったくらいで性別が分かってしまうほどの女好きなのだ。

一つの問題は解決されても、アドルバードの心が休まることはなさそうだ。

第8話：生物学上は女ですが

どうしてだろう。

アドルバードは紅茶を飲むふりをしながら考えた。

どうして自分はこの男と二人きりでお茶をしているのだろうか。いつも側にいるはずのレイも理由をつけて部屋から追い出されてしまった。

「それで、アドルバード王子。気楽に男同士の会話でもしようではないか。侍女も下がらせたから二人きりだ」

「ある意味で危険な気がするんですけどね」

襲われるとか襲われるとか襲われるとか。なんていっても相手は綺麗なものならなんでも好きなようだし。

「失敬な。男色の趣味はない！」

「それは一安心ですよ。あなたが思っていたよりも普通で」

「そっちの趣味があるのは君ではないのかね？ あの騎士殿に……っ！ き、汚いな！」

飲んでいた紅茶を吹き出してしまった。

咄嗟に横を向いたので人的な被害はない。吹き出したのも少量だったのが幸いした。間違っていない。この男は間違っていないのだが、勘違い 否、上手い具合に騙されてくれている。

「俺だつてそういう趣味はありません。レイは大切な騎士で、とても信頼している、それだけです」

ここでレイが女などと知られるわけにはいかない。アドルバードは平然を装いながら再び紅茶を飲む。

「いや、しかし……君が騎士殿に向ける目はなんとというかそれだけでは……」

「勝手に解釈しないでください」

「私はそういう趣味はないが、理解はあるぞ？」

「聞いてますか人の話」

とことんマイペースな野郎だな、おい。

アドルバードは少し苛立ちながら別の話題を考える。一刻も早くこの話題からこいつの脳を遠ざけたい。

「ふむ。私の気のせいだろうか。結構恋愛に関する勘は鋭い方なのだがね」

「真面目に恋愛をしていないわりにですか」

冷やかな目でカルヴァを見ると、心外な、とカルヴァは怒り始めた。

「私でも一応は　まあ、そのなんだ。そういう相手がだね」

「　いるんですか？」

アドルバードが心底意外そうに聞き返すと、カルヴァは少し照れているのか顔をそらした。歯の浮くようなセリフを吐くわりに、本気の恋愛の話は恥ずかしいとは変な話だ。

「そういう相手に限っていつもどおりに接することができないとはまた恋の難しいところだと思わないかい？　アドルバード王子」

「つまりは好きな相手を口説くのは苦手ってことですね。俺のことはアドルと。面倒でしょ、長いから」

「まあ、なかなか長い名前だな。ではアドル、私もカルヴァと。どうせ他に人はいないのだから気にする必要はあるまい」

話題は上手くそらせたようだアドルバードが一息つく。

「聞いてくれるか、アドル。どうすればいい？　どうすれば振り向かせることができるだろうか。きっと彼女は私のことを嫌悪しているのだ」

「　知りませんよ。少しは落ち着いたらどうですか。顔はまあいいんだから、誠実そうにしていれば普通は好印象を受けると思いますが」

「どこの誰に惚れているのかも知らないのにアドバイスを求められても、と迷惑そうにアドルバードは適当なことを言っておく。

「誠実か……まあそうだろうな。彼女はそういう男がいいんだろう

な

カルヴァは思いのほか自分の恋愛事となると陰気な性格になるらしい。浮き沈みの激しい人間だ。

いいかげん相手をしているのも疲れてきて、アドルバードはため息を零す。どうしてこの男の恋愛相談を受けなければならないのか。

「……君は十五歳だというのに良い男だな」

「女装している俺にそう言ってくれますか。ありがとうございます。どうすべきでしょうかね」

青年とはまだ呼べない自分を『良い男』などと評価した人間は未だかつて一人もいない。まして女装がこれほどまでに似合ってしまったのだからなおさらだろう。

「いや、外見なことではなくて。中身だ、器の方だ」

「当然です」

きっぱりとアドルバードが言い切る。

「自分が好きな人に相応しい人間であるように努力していますから」
「いるのかね」

「いないとは言ってません」

「興味深いな、私に相談するといい。安心なさい、人のものには手を出さない主義だ」

後半は信用できないとアドルバードがカルヴァをちらりと見る。

「彼女は俺の為に全てを投げ出してくれました。それに応えなければ男が廃るってものでしょう」

「なんだ、両思いではないか」

そうだったらどれだけ良いだろうか。アドルバードはまた一つため息を零し、首を横に振った。

「彼女が俺に向けているのは恋愛感情ではないですよ。忠誠とか、忠義とか、信頼とか、そういうものをまとめたものです」

「言い切れるのかね？」

問われて、言葉に詰まる。

確かめたことがないのでなんともしない。後者があるのは確か

だが、前者の有無は聞けるはずがないのだ。

「うづむ。どうもやはり騎士殿と重なるな」

思っていたよりも鋭い。

「騎士殿はもしや女性か？ よく考えればそう見えなくも……」

どうする？ 真実を伝えるか？ それとも隠し通すか？ しかし

相手は骨格で性別が分かるわけで。

「私は女ですが、それが何か？」

「うわああああ！」

突然降りかかったレイの静かな声にアドルバードが飛び上がる。

「れ、れ、レイ！ いつの間におまえ……！」

「今この瞬間に。侍女が新しい紅茶を運ぼうとしていたので、アドル様が地のままだと困りますから」

「あああああつ分かった、早く出て行け！ ちょっと内密の話を

「女」

固まっていたカルヴァアが呟く。

「ええ。生物学上は女ですが」

「答えなくていい！！」

叫びながらレイを部屋から追い出す。

扉を背に立ちながらアドルバードはぜえはあと肩で息をする。ほんの一瞬だったのものすごく疲れた。

「ふふふふふふ！ やはりそうか！ アドル！ 君はやはり騎士殿に惚　　！！」

「馬鹿かおまえはあ！ 聞こえるだろうが！ まだ廊下にいるっていうのに！！」

猛スピードでカルヴァアの口を塞ぐ。

まだレイが扉の外の近くにいるはずなのだ、カルヴァアの大声ですぐに気づかれてしまう。

「安心したまえ、人のものには手を出さないと云っただろう？ 人の恋路を邪魔するものは豆腐の角に頭をぶつけて死んでしまう」

「……馬に蹴られるじゃなくてか」

「どちらも一緒だ。さあ吐いてもらおうか！ たっぷりと！」

喜々として輝いているカルヴアの目を見てアドルバードはもう逃げ場がないのだと悟った。

自分の話は苦手なくせに、人の話を聞くのは大好きらしい。

第9話…この身をもって、あなたをお守りします

その頃、彼女は少し変だった。

気づかれているとは思っていないだろう。しかし小さな頃から共に過ごしてきた、想いを寄せる人の異変に気づかない馬鹿はいないだろう。

「レイ、何かあったのか？ 最近なんか変だぞ」

問い詰めると、彼女は少し困惑した。

他人では見分けることができないほどの、かすかな変化を、見逃さない自信は十分にある。

「何もありませんよ」

数秒後には本当にいつもどおりの顔で、そう答える。

ここで納得してはいけないのだ。

ここ最近の彼女といえば、肌はかすかに荒れているようだし、注意力も以前の半分しかない。以前がありすぎるくらいだから十分だが、いつも一つに束ねられているはずの髪が下ろされている。それが目の下のクマと少しやつれた頬を隠すためだということにも気づいていた。

「誤魔化すなよ、騙されないからな。いったい何年おまえと一緒にいると思ってる？」

「」

またレイの瞳が揺れた。

アドル様、と小さく呟く。

妙に色っぽいその呟きに、心臓が跳ねた。いつもとは違った、甘く優しい響きだった。

しかしすぐにレイの表情は一変し、獲物を狩る獣のごとく、人を殺める前の殺人犯にも似た冷たい顔をして、剣を引き抜いた。

彼女の背中を覆う長い銀髪を掴む。

次の瞬間に、美しい銀の長い髪が切り捨てられた。

はらりはらりと落ちていくそれに、アドルバードは少しの間見とれてしまった。夜空に落ちる流星のごとく、それは儂くも美しい光を放っていた。

何が目の前で起きているのか、分からない。

「この身をもつて、あなたをお守りします。アドルバード様」
幼い頃は世話役として共に遊び、数年前からは騎士見習いとして、去年からは正式な騎士としてずっと一緒にいた彼女は、そう言った。自分の足元に跪き、剣を掲げてアドルバードに差し出している。幼い頃に、そうやって遊んだこともあった。剣の誓いの、その場のワンシーン。

彼女が、自分をアドルバードと、略さずに呼ぶのは怒っている時か、真剣な時だけ。

ああ、そうか。

彼女は本気なのか。

その時、起きている事態がすぐには理解できなかった。
呆然と立ち尽くして、ただ頭の中は冷静にそんなことを考えていた。

ハウゼンランドでは髪の短い女性などいない。長い髪を切るといふのは不貞を働いた女性に課せられる刑であり、最大の屈辱のはずだ。

まして、女の騎士でさえ珍しいのに、剣の誓いまで。
異例の女騎士。

異例の幼い主。

周囲からの声は、優しくはなかった。それでも彼女は全てを自分に託したのだ。たった十五歳で。たった十三歳の自分に。

自分は彼女に答えなければいけない。彼女のその気高く美しい心に見合うだけの、男にならなければ。

「あとで知ったことだけど、その頃のレイにはたくさん縁談が上がっていたらしいです。なんせあの顔ですから。髪が長かった頃は男には見えなかったし。レイの家柄はそんなに良くないけど、レイの父親は俺の母の騎士で、王家からの信頼も厚かった。もちろん、レイ自身も。利用できる上に美人じゃあ、当然だったんだろな」

ドレスを着ることは滅多になかったが、年頃の少女らしく長い髪を結び、ドレスを着たレイはとても綺麗だった。誰もが一度は目を奪われるほどに。リノルアースと並んで舞踏会の花だったのだ。

太陽の花、とりノルアースは褒められ、密かにレイを月の花を称える者がいたくらいだ。

「当時君は」

「十三歳。レイの父さんも断り続けていたけど、中には伯爵公爵からの縁談もあつたらしくて、断り続けるのは難しかった。だからレイは女であることを捨てて、俺を選んでくれた」

「やっぱり相思相愛ではないか」

「違う。たぶん」

「どう違うのかが分からん。分かるように説明したまえ」

偉そうな、いや偉いのか、などと考えながら、アドルバードは一度自分の頭の中で整理した。

好きだとか言われたことはない。言った覚えもない。

だから相思相愛と言われると違う、と思う。お互いに信頼しているし、大事な存在であることには違いないんだけど。

「……好きだつて、言われたことないし」

「言わなくても分かるだろう」

「分かるわけないだろ」

アドルバードが即答すると、カルヴァアは肩をすくめて、ため息を吐く。その仕草に、なんだか無性に腹が立った。

「何とも思っていないような相手の為に、すべてを投げ出すかね？」

騎士殿はもう結婚さえ出来ないのだろうか？」

「出来ないわけじゃない。求婚してくるような男はいないってだけで」

似たようなものだよ、とカルヴァアが返す。

「私には、騎士殿が好きでもない相手との結婚を回避する為だけに剣の誓いを立てたとは思えないな。そういう人間じゃないだろう、彼女は」

「だったらどうして」

「それは騎士殿に聞くことだろう。いや、その前に愛の告白をするべきだな、うん」

もう一度お茶を吹き出しそうになって、阻止しようと無理に飲み込むと今度は咳き込んだ。

「な、何考えて」

「自分の胸に秘める愛を打ち明けるのだよ。そうすれば騎士殿も心うちを明かしてくれるだろう」

「で、できるかそんなこと……！」

カルヴァアは不満そうに唸る。

「十中八九、問題ないと思うがね」

「もしも振られたらどうしてくれる！？ 相手はほぼ一日中、三百六十五日一緒にいるんだぞ！？」

「気まずくて最悪。しかも剣の誓いは一度立てれば一生、破ることはできないのだ。」

「まあ、無理にとは言わんがね」

「そういう話が好きななら、あんたが片思いの相手を口説け」

「えーあー……ちなみにハウゼンランドは身分には厳しいのかな？」
逃げやがったな アドルバードはカルヴァを軽く睨みながら、
いいやとだけ答えた。

「家柄なんて気にする国だったらレイは俺の騎士なんかできない。
爵位はないからな。レイの父親の働きで、特別に剣聖っていう称号
があるけど」

アドルバードの返事を聞いて、カルヴァは満足げに微笑む。

「それは素晴らしい。良かったな」

何が素晴らしいのかさっぱり分からないまま、その話はそれで終
わった。

第10話：いけませんよ、一人で出歩かれては

嫌だ嫌だと思っていた今回のアルシザス訪問も、女装が見破られたにも関わらずお咎めもなし、第二の問題であるレイの身の危険については本人曰く、人のものには手を出さないだとか、その他もろもろの理由で実際には問題にすらならなかった。

悩みといえばカルヴァの恋愛相談を相手も知らないのに聞かされることくらいだが、それはまあ大目に見てもいいだろう。

南国の茹だるような暑さにも慣れてきた。もとより城の中は上手く工夫されていて、日光の下に出ない限りはそう暑くもない。

「なんだか拍子抜けするくらいに楽な仕事になったなあ」

「これから陛下のところですか」

レイが何か言いたげな目でそう問いかけてきた。

「ああ。分かっているとは思いが、ついて来なくていいからな」

恋愛相談どころか油断すれば自分の話までさせられるのだ、本人にいられると相当まずい。

「ええ、もちろん私も馬鹿じゃありませんから、一度言われれば分かります。しかしアドル様、一応私はあなたの騎士で、護衛なのですが」

「分かっているよ。でもまあ、その、男同士の話ってもんでな」

「」

また、レイが何か言おうとして言葉を飲み込んだ。

言いたいことがあれば容赦なく言う性格の彼女が躊躇するなんて可笑しい。

「……お気をつけて」

結局彼女はそう言ってアドルバードを送り出した。

昨日も、一昨日も、せめて部屋の前まではお送りしますと言って譲らなかったというのに。

珍しいこともあるものだ、その時深く考えなかったことを、アドルバードは後で後悔した。

「リノルアース姫」

カルヴァの愚痴を聞く為に一人、廊下を歩いていたアドルバードはそう話しかけられた。

即座に淑やかで可憐なりノルアースの顔を作り、振り返る。

「なんですか？」

「騎士様はご一緒ではないのですか？ いけませんよ、一人で出歩かれては」

見たことのない、城の警備の男だった。服装で分かる。

「大丈夫ですよ、すぐそこまでですから」

につこりと微笑みながらアドルバードは踵を返し、再び目的地へ向かおうと歩き出す。

「駄目ですよ」

すぐ後ろからの声。

「……っ！」

薬品の匂いがした布で、口を塞がれる。

後ろから羽交い絞めにされて動けない。男はアドルバードよりも頭二つ分は背が高かった。

「こつやって、誘拐されますよ？」

視界が揺らぐ。

男の顔をもう一度見ようと思っっているのに、ぐらぐらと屋気楼のように歪んでいてはつきりと見えない。

「……レ、……イ……」

いつもすぐに駆けつけてくるはずの騎士の名を呼んでも、その声はあまりにも小さすぎて届かない。

駄目だ、レイが心配する。

アドルバードは消え行く意識の中で、たった一度だけ見た、彼女の不安そうな顔を思い出した。

そう、それは、二年前の剣の誓いの時だっただろうか。

彼女は冷静で、いつも表情を変えず、親しい者以外から誤解されがちだった。

彼女が笑ったところを見たことは、そんなに多くない。でもそれ以上に、不安そうな顔なんて見たことがなかった。もちろん、泣き顔も。

たった一度だけ。

あの長いようで短い一瞬で。

彼女は不安そうに見つめてきた。

跪き、自分の命とも言える剣を差し出していた手は、かすかに震えていた。受け取るか、受け取らないかのその瞬間、彼女はどのようなもなく不安だったのだろう。

そっと、自分も震える手でその剣を受け取ると、彼女は一瞬だけほっとしたように微笑んだ。その顔はとても綺麗で、儂かった。

レイ。

「アドル様？」

何か聞こえたような気がして、レイは部屋から出る。

やはり追い出されると分かっているも部屋の前まで送れば良かった。

ただらうか、妙な胸騒ぎがする。

どう足掻いても男になれないということは分かっているのに、さりげない言葉でへそを曲げるなんて子供のすることだ。

あの人の側にいるためには女ではいけない。だから二年前、長かった髪と共に女だった自分も捨てた。あの人を守る。あの人の側にいる。すべては自分の我儘だ。

「失礼します。リノルアース様はいらっしゃいますか？」

いつも主とアルシザス国王がお茶を飲みながらなにやらこそこそと話し込んでいる部屋まで足を運んで、扉をノックする。

「入りたまえ、騎士殿」

「は」

扉を開けた先に、可憐な姿の主はいない。

「陛下、アドル様は　っ！」

「落ち着きたまえ、今探させているところだ。怪しい者が最近ちらほらといたようでね、彼女　彼でもいいか、彼には君がいたので言わないでいたのだが」

「どうしてそのようなことを隠しておかれたのですか。このまま主に何かあれば大きな問題になりますよ」

「脅しかね」

カルヴァが低い声で呟く。顔は笑ってはいるが、目が笑っていない。

「そう聞こえるのであれば。犯人の目星はついていてるんでしょね？」

「一国の王に向かって随分な口を……まあいい。剣の誓いとはそういうものだからな。騎士殿が案じているのは国でなくただ一人だ。安心したまえ、予想はついてる」

「ならば」

「ただ面倒な相手だ。騎士殿、リノルアース姫の滞在の延長を。そして替え玉を用意しなければ。そうだな、一週間だ」

アドルバードと話している時の国王と、今の国王、どちらが本物

なのかなどと考えつつ、レイはため息を吐き出す。

「替え玉ならばとっておきのがいますよ、国王陛下」

「ほう？」

レイは足音を立てずに扉に忍び寄り、躊躇なく扉を開けた。

「きゃああっ！」

転がる、ハウゼンランドの侍女。

「盗み聞きとははしたないですよ、リノル様」

「……ばれてたのね」

むすつと不機嫌そうにリノルアースが呟く。普段の姿とは違って、髪は亜麻色に、肌は少し濃い色になっている。髪はかつら、肌は染め粉だろう。

「大勢の侍女に紛れていても分かりますよ。まあ、アドル様は気づいていないでしょうが。話は聞いていたでしょう。元の姿に戻って、リノルアース様を演じてください」

「演じてって……本物ののに」

「いつものように振舞われては困ります。アドル様が演じていたりノルアース様です。ルイ、隠れていないで出てきなさい」

「はい……」

しょんぼりとして出てきたリノルアースの騎士、ルイまでもが侍女の格好をしていた。さすがにレイもそれには驚く。

「おまえまでそんな格好を……」

「リ、リノル様がああああっ!!」

姉の言葉に、ルイは涙声で叫ぶ。

「似合うでしょう!? 無理かなあと思ったんだけど意外と似合うでしょうっ!?!」

リノルアースが目を輝かせながら喜々としてレイに問いかける。

「……正直なんとも言えない。」

「あー……もうそろそろ説明してくれないかね、騎士殿? それよりも先に挨拶かな?」

しばらく呆然として口もはさまなかったカルヴァが、控えめに話

しかける。

「アルシザスへようこそ、本物のリノルアース姫」

苦笑しながらカルヴァはアドルバードに言った言葉を、本物にも言う。

リノルアースはそこに国王がいたことをすっかり忘れていたらしく、一瞬目を丸くして振り返った後、極上の笑顔で答えた。

「お会いできて光栄ですわ、アルシザスの国王陛下」

その姿はいつもドレス姿ではないのにも関わらず、太陽の下で誇り高く咲く花のごとく、美しかった。

第11話：あなたの物語を、ド派手に演出して差し上げますよ

「アドルバードを連れ去ったのはおそらくバーグラス卿だ。あれは私のやり方に不満を持っていたからな。金魚の糞どももたくさんいるときた」

カルヴァが地図を広げ、バーグラス卿の城を示す。

「ここにいるとは限らない。さっき言ったとおり仲間がいるだろうからな。そうなるとこの広いアルシザスのどこにいるか……」

「回りくどいことは止めたらどうです。陛下」

レイがいつもに増して低い声で呟く。

「もとよりあなたの作戦だったのではないですか？ アドル様を使って、不穏分子を炙り出すために、あなたはアドル様を利用した」
カルヴァが微笑んで、深く椅子に腰を下ろす。

「あなたとアドル様が親しければ、他の目にはリノルアース姫と国王が恋人のようにも見えたでしょう。あなたはそれを利用して、あえて我々ハウゼンランドの者には危険性を伝えなかつた」

「なんのことかな、と誤魔化したほうが利口かね」

「止めたほうがよろしいですよ、陛下。レイは怒ると誰にも止められません」

リノルアースが冷静にカルヴァを制す。

もともと、レイを止められるのはアドルバードだけだ。

「癪ですがあなたの計画に乗りましょう。ここでアルシザスに貸しを作ることは私の主にとっても利益になりますから。アドル様が男とばれない間は安全でしょう。もちろん首謀者に釘を刺していただきますが」

「ばれないでしょ。陛下にばれたって事だつて驚きなのに」

「もちろんバーグラス卿には釘を刺しておくし、彼に何かあれば責任は負うとも」

怖い。

リノルアースのすぐ側で控えているルイはそう思った。

部屋の気温が低くなっている。レイが猛烈に怒っているのだ。そしてそれに動じていないリノルアースとカルヴァも怖い。

「本物のリノルアース姫だったらその何かを理由に正式に求婚を申し込むつもりだったのでは？」

「はっはっは。それは上手くいけばの話だとも」

笑ってない。目と声が明らかに笑ってない。

ルイはつくづく自分は凡人なのだなあ、と思い知らされる。ここがハウゼンランドだったら夏でも凍死していただろう。

「それで、どうするつもりなんです」

「明日日、舞踏会を予定していただろう。あれにはバーグラス卿も来る。おそらくその金魚の糞もな。そこで捕らえたはずのリノルアース姫がいたら？」

ガタツと音をたててレイが立ち上がる。

「駄目です。アドル様に危険が」

「おそらく確認するだろう。捕らえた方はどうなっているか。そして今日明日で揺さぶる。より効果的になるようになる」

「だからアドル様が」

カルヴァが微笑む。

「君たちにはむしろ感謝しなくては。本物のリノルアース姫よりは計画が楽に進みそうだ。なんていっても捕らわれたのは男だからね、ある程度のこととはどうにかできるだろう」

「レイっ！」

リノルアースの制止に声が響く。

レイは腰の剣を抜き、カルヴァに向けていた。切っ先はカルヴァの首を間違いないく狙っていた。

「私に貸しを作るのではなかったかな？」

「ここで排除した方が私の主のためにはなりそうです。アドルバード様は私が見つけ出します。バーグラス卿とやらを拷問にかけてで

も」

「国王を殺せば騎士殿はさすがにただではすまないと思うがね。その主も」

レイの目は本気だった。

しかしカルヴァは怯えることもなく微笑を浮かべている。

「冗談ばかりおっしゃっていると、ハウゼンランドを敵にしますよ、陛下」

今まで外野だったリノルアースが微笑みながらそう言う。

「少なくともあなたはハウゼンランドの次期国王である兄の身を危険に曝したわけです。レイの行為もあながち非難されるものではないかもしれませんが、廃れたとはいえ剣の誓いをたてた騎士です。主を第一に動くのは当然のことですもの。そんなこと、子供でも知っていることですよ？」

目が笑っていない。

十五歳の少女にこんな顔ができるとは思えないが、リノルアースは確かに大人までも圧倒できそうな氷の微笑でカルヴァを見つめていた。

「これほどの強国の国王ならば、もっとましな提案をしてくださいな。あなたの頭は飾りじゃないんでしょう？」

「リ、リノルアース様っ！」

いくらなんでも国王相手にそんなことを言うのはまずいと、ルイが慌てる。

「何よ、ちゃんとした言葉遣いで話しているでしょ。何も馬鹿ともロクデナシとも阿呆とも言っていないじゃない」

「言ってます！ 今まさに言ってます！」

顔を真っ青にして慌てるルイを見て、リノルアースが楽しげに微笑む。

「今の作戦で十分だよ、リノルアース姫。すでに王の影が動き出している。彼らに探させればすぐにアドルバードも見つかるだろう」

「隠密ですか、アルシザスの」

「そのようなものだ。どこの国にでもあるだろう」

おそらく、とだけレイは答えた。

王の判断で、王のためにだけ動く者の存在は知っているが、それをここで他国に教える必要はどこにもない。

「彼らが居場所を見つけ、舞踏会で騎士殿が迎えに行けばいい。それまでは方が一のために見張らせておこう」

「それまで待つ意味が分かりません」

「私に貸しを作った方がハウゼンランドとしては得だと思いがね？」

「つまり、言つとおりにしるということですか」

女性とは思えないほど、低い声でレイが呟く。

レイとカルヴァの間には、静かに、しかし確実に火花が散っていた。

「損は、させないつもりだがね」

苦笑しながら呟くカルヴァを睨みながら、レイは思案した。

しかしいつものように頭が冷静に働かない。大丈夫だろうか
と不安になる一方だ。

「……それなりの見返りは期待しています、陛下。レイ、ここは陛下の言つとおり動く方がいいと思うわ」

「リノル様　っ！」

「今のあなたの下した判断じゃ信用できないわ。冷静になりなさい、レイ。アドルはあれでも一応男なのよ？　自分の身一つくらい守れるわ。よく知らない他国であなたがあれこれ動き回っても無駄なだけよ」

レイが黙る。

普段ならばリノルアースに負けるわけがない口論だ。レイならば冷静に、リノルアースを説き伏せることができるはずなのだから。

「舞踏会には兄も招待しているってことにしていただけかしら？

陛下。見返りとして貴国との同盟を望みます。今ここで確約していただけないのなら、その作戦には乗れませんわ。こちらは国の宝である王子の安全がかかっているんですもの」

「しっかりとした姫君だ」

にっこりとリノルアースは微笑む。

国力の差からして、アルシザスとハウゼンランドが同盟を組んでも、得するのはハウゼンランドだ。

「そして同盟についてはすべて兄のしたことにしてください。姫の私が政治に口出すのは良いとは言えませんし、兄が王座につくときの糧になりますから」

「まあ、良いだろう。美しい王子と姫、そしてその騎士殿のために。美しいものは人類の宝であるし」

ため息と共に、カルヴァが承諾した。

リノルアースは美しい微笑みを崩さないまま、立ち上がる。

「あなたの物語を、ド派手に演出して差し上げますよ」

リノルアースは扉に向かい、ルイが扉を開ける。その後ろをレイがついて行き、一礼して扉を閉める。

「随分と、怒っていらっしやいますね」

レイがリノルアースの隣に立ち、囁く。自分はもちろんカルヴァの行為に腹を立てていたし、それを隠そうとも思わなかったが、リノルアースもかなり怒っている。

「当たり前よ。こつちを馬鹿にしゃがって。ふんだくれるもんはふんだくってやるわ。ハウゼンランドを利用しようとしたこと、後悔するがいいわ」

すっかり口調も悪くなり、笑顔も仮面も取り外されている。ルイは女性二人を盗み見ながら、そつとため息を零した。

ハウゼンランドの女は怖い。

そして。

リノルアースも相当なブラコンだ。

第12話：大人しく捕らわれの身でいると思うなよ

「……………うん」

ひどく目覚めが悪い。

そういえばレイはどこだろう。いつも起こしに来るのに、今日はまだだるうか。

鈍く痛む頭を押さえながら、アドルバードは起き上がった。首にかかる髪を鬱陶しげに払いのけて、かつらをつけたまま寝てしまったのかと思う。

「……………どこだここ」

知らない、家具やらを見回しながら、アドルバードは呟く。

冷静に振り返る。今はアルシザスに来ていて、すぐにカルヴァに男だつてばれて 気がつけばアルシザスの城に用意された部屋よりも、ハウゼンランドの自分の部屋よりも狭い。調度品は上等なもののようなが。

「そうだ」

カルヴァのところに行く途中で、誰かにリノルアースと呼ばれて振り返って、薬を嗅がされた。

その後の記憶がない。

「誘拐か？」

リノルアース姫を。

思い当たることはいくつもある。これでも一応は一国の姫（本当は王子）であるわけだし、アルシザスに滞在中にそういう事態に陥れば、問題は広がる。

ベットから下り、窓に歩み寄る。人一人通ることが精一杯であるう小さな窓の外には鉄格子が嵌められている。それにかんりの高さがあるようだ。落ちたら間違はなくあの世逝きだろうな、とアドル

バードは冷や汗を流した。

扉も固く鍵がかけられている。自力での脱出は不可能だろうか。

「……心配してるよなあ」

太陽の位置からいつて半日以上が経過している。レイがアドルバードの不在に気づかないわけがない。

誘拐犯が顔を出さない以上アドルバードにはこれ以上打つ手が無い。なんとも虚しい状況だ。

「……」

扉に歩み寄り、耳を押し当てる。

かすかな人の気配を感じ取って、アドルバードは小さく咳をした。

「……誰か、いませんか」

自分でも驚くほどのか細い作り声で、扉の外の人間に話しかける。返事はない。

「ここは、いったいどこなの。どうしてこんな……」

嗚咽交じりに呟くと、コンコン、とノックされる。

かかった、とアドルバードの目は輝いた。

即座に表情をしおらしいお姫様に変え、アドルバードは答えた。

弱々しい可憐なお姫様の方が相手も油断するだろう。

「……どうぞ、と私には言う資格がありませんけれど」

なんせ閉じ込められてるんだ。

鍵が開けられ、扉がゆっくりと開かれる。入ってきたのは黒髪に、褐色の肌の中年の男性。一目でアルシザスの者だと分かる。体格が良く、体重はアドルバードの倍以上あるだろう。流れる汗を拭きながらアドルバードを舐めるように見る。分かりやすいくらいに欲深そうな男だ。

「お初にお目にかかります、リノルアース姫。このような招待で混乱されていることでしょうか」

当たり前だろうが。この野郎。

と、という心の声など少しも顔に出さずに、アドルバードは目を伏せる。

「……え、ええ。もちろん。その、あなたは どうしてこのようにことを？ 何か事情があるのでしょうか？ 話していただければ、お力になれると思いますわ」

「この国のためです。 姫も祖国を愛するのならばご理解いただけるでしょう。 あの国王では駄目なのです」

と、いうことはこの男はやはりアルシザスの貴族あたりなんだろう。カルヴァに不満を抱いて謀反を企んだ そんなところだろう。アドルバードは言葉を慎重に選びながら男から情報を探る。

「国王 アルシザス国王、カルヴァ様のことでしょうか。 私はこの国に来たばかりなので、あなたがどうしてこのようなことを考えたのか、そこまでは分かりません。 しかし私も己の祖国は心から愛しております。 国の為に良いと思うことをする その行為は、十分に分かります」

だからってこんな卑怯なことは許せないけどな。

内心では男に唾を吐きながら、アドルバードは可憐な姫を演じた。一ヶ月の恐ろしい特訓のおかげで違和感などかけらもない。

「ですが、アルシザスの国情になぜ私が関係するのです？ 私はアルシザスの足元にも及ばないような、小国の姫です。 私を利用して、何も得られないと思います」

「あなたが陛下に嫁ぐという話が出ています」

ぐ、とアドルバードは言葉を飲み込んだ。 どこでそんな情報が遠まわしで求婚されたことがあるぶん、全くの嘘というわけでもないから、返す言葉に迷う。

深く考えれば未婚の姫が他国を訪れること自体が誤解を招く行為だった。 ましてアドルバードとカルヴァは頻繁に二人で話す機会があったのだ。

「そのような話、聞いた覚えはありませんわ。 私は見聞を深めるためにこの国に来たのですもの」

「……どうであれ、姫の身柄は陛下に対する取引材料になるのですよ。 大事な国賓ですからね」

それはさすがに否定できなかつた。

「私は、どうなるのですか」

「陛下次第ですよ、姫。ご安心ください、危害を加えるつもりはありません」

いやらしい笑みを浮かべて、男は部屋から出て行った。名乗りもしないなんて（誘拐犯なのだから当然かもしれないが）なんと失礼な奴だ。

部屋の前にいる見張りの顔がちらりと見えた。申し訳なさそうにアドルバードに頭を下げる。

あの見張りの男は、利用できそうだな。

問題が大きくなる前にここから出たい。

簡単な脱出が出来ないというだけで、アドルバードは自力で逃げ出すことを諦めらわけではなかつた。

窓から外を見ていると、馬車が遠ざかっていくのが見えた。

おそらく先ほどの中年の男が去つたのだろう。

「あいにく、か弱いお姫様じゃないからな。大人しく捕らわれの身でいると思うなよ」

アドルバードは不敵に微笑み、遠く走り去る馬車を見送つた。

第13話：見てみぬふりなんてしないで

「レイ、不本意でしょうけどアドルが見つかるまではリノルアース姫の護衛を続けてよ？ ルイと入れ替わるわけにはいかないんだから」

「 わかっています」

ぼつりと、レイが呟いた。

リノルアースはため息を吐き、部屋に居る間はほとんどレイには話しかけなかった。

彼女がいくら大の男相手に一本とる事が出来るほど強い人でも、こつという状況でまで気丈に振舞えとは言えない。彼女は自分を責め続けているはずだ。

「あおう、リノル様。つまり俺はこのままの格好を続けなきゃいけないんですか？」

おずおずと侍女姿のルイが話しかけてくる。空気の読めない男だ、とリノルアースはルイを軽く睨んだ。

「当たり前でしょう。急に騎士が二人に増えたら変じゃないの」

本当は誤魔化す方法などいくらでもあるのだが、ルイの女装姿は思いのほか面白く、そして遊びがいがあるので続行を決める。

「そ、そんな！」

「いい加減に諦めなさいよ、ルイ。男らしくないわ」

あからさまなため息を吐き、肩をすくめる。

「この格好自体が男らしさの欠片もないんですけど!？」

「その格好で男らしかったら気持ち悪いわ。そんなだったら似合わないから着せないわよ」

筋肉質のごつい男が侍女の服を着ているのを想像しただけで吐き気がする。

ルイは長身だし、意外とたくましいのだが思っていた以上に似合

っていた。

「似合ってるんですか！？ この格好が！？」

「もちろん。とおっても可愛くてよ。ルイちゃん」

にっこりと笑いながらリノルアースがそう答えると、ルイはなにやらよく分からない表情を浮かべた。

泣き出しそうな、嬉しそうな、それで顔が真っ赤だ。

「あまり、弟をからかわないで下さいますか。リノル様」

ため息と共にレイがやっと言葉を発した。自分の中でやっと思いがついたらどうか、とリノルアースが少し安堵する。

「だって面白いんだもの」

「ルイはあなたの騎士であって玩具ではありませんよ」

そう諭すレイを見上げながら、リノルアースが微笑む。

「懐かしいわ、それ昔もよく言われたわよね？ ルイと会ったばかりの頃」

「それはつまりリノル様が八年前からあまり成長されていないということですね」

さらりとレイが切り返した。

レイは双子の兄妹と生まれた時からの付き合いだが、ルイは八歳の頃に初めて二人と出会った。

レイは、王妃の騎士であり、国王から特別に剣聖という称号を与えられたディーク・バウアーの一人娘で、その父の才能を色濃く受け継いでいた。

幼い彼女に与えられた役割は王の子供の遊び相手でもあり、小さな護衛でもあり、世話役でもあった。破天荒な性格の双子に並みの精神の持ち主では耐えられなかったせいでもあるが、図らずも彼女は幼くしてかなり有力な地位を手に入れてしまったのだ。一年中、何の申請もなく王城に出入りできるということは普通の貴族でも困難だろう。

対するルイは、正確にはディーク・バウアーの息子ではない。赤子の時に拾われ、養子としてバウアー家に迎え入れられたのだ。も

ともとは爵位もないバウアー家の、養子ごときではレイのように特別な扱いはされなかった。

それでも八歳になってようやく正式にレイと同じ立場になったのは、国王夫妻の計らいだっただろう。

「成長してないなんてひどいわ。それはレイのことじゃないの！」

「ルイは成長してますよ。剣の腕も随分と上がりましたし、立場を良く理解してます」

こうしてリノルアースやアドルバードに遠慮なくお説教できる人間はそういない。もしかしたらレイ一人かもしれない。

リノルアースの顔が突然曇った。

一瞬だけルイのことを見つめて、すぐにレイに視線を移す。その一瞬の瞳がひどく切なげでルイの心臓は跳ねた。

「……レイの言う立場ってなんなの？ 私達はただの友達ではいけないの？ 主従関係しか望めないの？ そんなの私もアドルも嫌だわ」

リノルアースは真剣な表情で、静かに呟く。怒っているのか、沈んでいるのか分からなかった。もしかすると両方なのかもしれない。しかしレイの言う立場というものは決して消えるものではないし、消し去ることは不可能だ。リノルアースは王族で、ルイやレイは違う。リノルアース自身も十分に理解しているはずだ。

「リノル様がそう言うって下さるのなら、友人なのでしょう。しかし決して越えてはいけない壁があります。分かっているらっしゃるでしょう」

「分かりたくないわ。そうやってレイは徐々に徐々に距離を置いていくのね。それがどれだけアドルを傷つけているのか分からないの？ あの子はあなたに守って欲しいなんて思っていないのに」

「リノル様のおっしゃることは推測でしかありません」

レイが静かにそう告げる。

「姉さん、そんな」

重い空気の中いたたまれなくて、ルイはつい姉を止めようと口を

聞く。しかし後の言葉が続かなかった。

「推測なんかじゃないわ。私とアドルはもともとは一つだったんだもの。考えていることくらい分かる」

「リノル様」

ルイには二人が止められなかった。

どちらの考えも理解できる分、どちらに味方すればいいのかわからない。

お願いよ、とリノルアースが懇願した。

レイはただ黙って自分を見上げてくる小さな姫を見つめた。

「アドルの想いを、見てみぬふりなんてしないで」

レイは何も言わない。

何も言えない。

お互いの想いなんて、確認したことはない。レイが確かめることもない。

どれだけ自分があの人の側にしようと思っても、こんな形以外に方法はなかったのだ。いずれ王となるあの人の、妻になりたいなんて願ってはいけない。

有力な貴族の娘なり、他国の姫なりを王妃に迎え入れることがハウゼンランドを守る道なのだということは彼自身よく分かっているだろう。

だから言わない。

自分の想いは言葉にしない。

もしもほんの少しでも告げてしまえば、彼はそう遠くない未来で傷つくだろう。

鈍感な相手だからこそ通用することだった。事実リノルアースに

モルイにも　おそろくあの腹黒い国王にも、知られてしまっているのだから。

守るのが自分の使命だから、彼の思いにも気づかないふりをする。ありきたりな姫と騎士の恋ではないのだ。物語のように上手いくわけがないのだ。

彼は国王となる人なのだ。

それでも側にいたいと、願うのは自分だから。

こんなやり方しか思いつかなかったのだ。

第14話：私にも私の誇りがあります

アドルバードの計画は太陽が西に沈み、あたりが暗くなってから実行された。

相変わらず扉の所には見張りがいるようだ。扉に耳を寄せれば息遣いと衣擦れの音が聞こえる。

日が暮れるまでの間ずっとしおらしいお姫様を演じ続けた。姿は見えなくても泣いているふりだけは扉越しに聞こえるだろう。

ドレスの下には念のためと用意していた短剣が忍ばせてある。取り上げられていないのが幸いだった。

色とりどりの花が生けられている大きな花瓶を持ち上げ、思い切り床にたたき付けた。

大きな音が部屋に響き、花瓶は粉々に砕け散った。

「なんだっ!？」

扉の外の見張りが部屋に入ってくる前にアドルバードは扉のすぐ隣に立った。

「ど、どうしました!？」

勢い良く開けられた扉から、気の弱そうな例の見張りが入ってくる。

アドルバードは手に握っていた短剣を男の首にあて、低く呟いた。「大人しくして」

声はアドルバードの地の声だったが、それも男としては高めだった。

「ひ、姫……!？」

「見張りはあなただけ？ それとも他にいるの？」

地声で話しても男とばれていないようなので、アドルバードはそのまま姫として振舞うことにした。女と思われているほうが舐められる分楽だ。

「階下にあと数人います……姫、どうか大人しく部屋にいてください。どう考えてもあなたが他の男を相手にするのは無理です」

悪い奴ではなさそうだ、というアドルバードの認識は間違っではないのだろう。しかしここで引き下がることはアドルバードの中の選択肢にはなかった。

「王族として他国の貴族ごときに利用されるのはまっぴらです。私にも私の誇りがあります。私がこうしていることで祖国に何らかの害があるのなら、なおさら」

「が、害など……ハウゼンランドには手を出したりしません。我々の目的はあくまでもこの国の改革で」

「そう思っているのはあなただけでしょ」
きっぱりと、アドルバードは言い切った。

昼間にやって来たあの男はそんな生易しい考えを持っていないだろう。あれは強欲な者の目だった。アドルバードを　リノルアース姫を誘拐するという段階でこの問題にハウゼンランドは関係してくるのだ。

「そんな」

「ごめんな」

アドルバードはそう呟き、見張りの首に手刀をお見舞いする。それは脳を揺らし、軽い脳震盪を起こされるので見張りは簡単に気絶してしまった。

これでも男、そして一応は王族だ。身を守る術は身すべについている。特注のドレスはこれでも動きやすいように工夫されているのだが、まわりつくスカートはこの上もなく邪魔だった。

アドルバードは気絶した見張りの男を見る。

「　本当にごめん」

一度手を合わせ、そう謝罪してから男の服を剥ぎ取ってそれに着替えた。代わりにドレスを着せるのも哀れだったのでベットのシーツをかけておくことにした。

服は少し大きかったが、ドレスよりは動きやすい。

それに派手なドレスを着て逃げ回ってもすぐに見つかるに決まっている。

「怒ってるよなあ、絶対怒ってるよなあ……」

アドルバードはぶつぶつと呟きながら部屋から出た。

レイのことだ、かなり確実に怒っているだろう。レイが本気で怒るとかなり怖い。あの綺麗な顔が迫力を増幅させていた。気温が下がったような錯覚さえ起きるのだ。できることなら彼女を怒らせるのは避けたい。

それに、心配させるのも。

とりあえず武器となるのは隠し持っていた短剣だけだ。お姫様（だと思っっている）相手に武器を持ち出したりしてこないことを祈る。「おい、どうした？ 交代の時間過ぎてるぞ……って！」

「やば。」

声に出さなかったのは幸いだった。

「どうやって出てきた！ しかもその服　！」

「騒がないでもらえるかしら？」

アドルバードはにっこりと微笑みながら隙だらけの男の首筋に短剣を突きつけた。

「なっ……」

「か弱いお姫さまと侮ったのが不幸だったわね。女は一つや二つ別の顔を持つてるものよ？」

本物のリノルアースだったらここで容赦なく男の急所を蹴るのだろう。痛みが分かるアドルバードには躊躇われる行為だ。

「逃げ切れるとも思ってたんのか？ お姫様？」

見張りの男とは違って下品な笑みを浮かべてアドルバードをじろじろと眺める。

はあ、とアドルバードはため息を零した。

これは躊躇っているような場合ではないらしい。今はリノルアース姫なのだから、ということ自分で自分のことを許そう。

「悪いな」

アドルバードは地声でぽつりと呟き、容赦なく、全力で相手の股間を蹴り上げた。

男は唸りながら前のめりに倒れこむ。そこでアドルバードはとどめに手刀をお見舞いした。男はあっさりと崩れ落ちる。

「うえー……痛いだろうなあ、後味悪う……」

アドルバードは合掌しながら階段を駆け下りた。

かなり高い塔で、しかも階段は結構狭い。ここでまた誰かと鉢合わせということも十分にありえるだろう、とアドルバードは短剣を握り締める力を強める。

その後二人に見つかったが同じような手口で気絶させた。

まさか深窓のお姫様が果敢にも脱走するとは誰も思っていなかったらしく、誰もが油断していたのがアドルバードにとっての幸運だった。

厩こしに行き、気に入った馬を一頭拝借した。誘拐犯に遠慮する必要などない。

馬はよく手入れされていて、人懐っこいようだ。すぐにアドルバードに懐いてくれた。

アドルバードは一晩中走るつもりだった。

王都までどれくらい離れているのか、ここはどこなのかも分からない。自分の国でさえ王都以外の場所で一人になったことなどないというのに、他国なのだから心細さも一層大きい。

「どこか貴族の屋敷に行つて保護をしてもらうか……いや、もしも奴らの仲間なら危険だし　かといって王都まで一人で帰れるか？　路銀もない。あるのは服とかつらと拝借してきた馬だけ。」

ハウゼンランドならどうにかなるのに、という悔しさがこみ上げてきた。同時にアドルバードは自分を叱る。

他国だからなんて関係ない。自力でどうにかするしかないのだ。しばらく走り続け、追っ手がいないことを確認するとアドルバード

ドはかつらを投げ捨てた。

レイヤリノルアースに叱られるだろうか。しかしこうすればアドルバードは本来の少年に戻るのだ。これから追いかけてくるであろう奴らの目を欺くことができる。

赤みがかつた金髪がきらきらと輝いていた。

夜空に浮かぶ満月だけがアドルバードの進む道を照らしてくれた。

第15話：案内してくれよ。簡単だろ？

リノルアースとレイは朝早くに突然カルヴァに呼び出された。

急いで来るようにとのことだったので文句を言うリノルアースを
ルイと二人で宥めつつ、三人でカルヴァの執務室を訪れた。

「どうしてくれるのかね」

第一声がそれだ。

「突然何なんですの？ いくら陛下でも失礼ではなくて？」

不満の溜まつているリノルアースは喧嘩腰に言い返した。ルイが
慌てて止めようとしている姿が滑稽だった。

「アドルバードが逃げ出したのだよ。単身、昨晚ね」

はあ、と重いため息を吐き出しながらカルヴァが頭を抱えた。

「おかげで面倒なことになったよ、こっちの計画が台無しだ」

「まあ、男に大人しく捕まつてるというのが問題なんじゃありません
んこと？ 陛下だって誰かに捕らえられたらじつとなんてしないで
しょう？」

「もちろんだとも。男のプライドの問題だ」

目を輝かせて即答するカルヴァに、リノルアースがあからさまに
ため息を吐く。

「それならアドルだって同じです。こうなるであろうと私もレイも
予想しておりましたわ」

「ならどうしてそれを言わない？」

リノルアースが艶やかに微笑む。

意地の悪い笑顔だ。

「言わなければならぬ理由がありませんわ」

間違いないそれは嫌がらせだった。

見かねたレイが割り込んでカルヴァとの話を引き継いだ。

「陛下、それでアドル様はどこいらっしやるんですか？」

「言わなければいけないかね？」

子供じみた仕返しにレイは腹を立てたりはしない。この程度で怒っていたらアドルバードやリノルアースの相手なんて出来るはずがない。

「当然でしょう。もはやアドル様は一人でいる必要がありません。すぐに迎えに行きます」

「騎士殿が？ 無理だろう。あなたはリノルアース姫の側を離れるわけにはいかないのだから」

レイはいたって冷静に言い返した。

「もちろん私はここでリノル様をお守りします。ルイがアドル様を迎えに行けばいい。案内役を用意してくれませぬ？」

少しも怒らないレイがつまらないのか、カルヴァの反応がいまいちだった。

こういう人間の相手にもレイは慣れていた。

「陛下、やることはたくさんあるでしょう？ 不穏分子を洗い出すのではなかったのですか？」

「いまさらどうやって？」

「それを考えるのがあなたです。幸い、策略家はここにもいらつしやいますよ。ねえ、リノルアース様？」

話しかけるとリノルアースはそっぽを向いた。

カルヴァに手を貸すのは嫌らしい。

「どうせです。派手に演出しましょう。もう二度と馬鹿な真似が出来ないように。ついでにこちらのストレスも発散できるようなね」

レイが微かに微笑む。

リノルアースもまんざら悪くはなさそうに、カルヴァの向かいに腰を下ろした。

「何か良い案でもあるのかしら？ レイ」

「気に入っていただけのかは分かりませんが」

そう口では言いながら自信があるのだろう。レイはかすかに微笑

む。

「レイが私の期待を裏切ったことはないわ。　あら、レイまだいたの」

「は、はい？」

後ろに控えていたルイにリノルアースが話しかける。

「さつさとアドルを迎えに行きなさい。ちゃんと連れて帰ってこなかったら殺すわよ？」

「うええええ！？　こ、殺すって……そんなあぁ」

「リノル様が手を汚すまでもなく私が殺ります。愚弟の不始末は姉の私が」

冷静に自分の姉が答えるのでルイはますますうろたえた。　なんだんだこの二人は。

「駄目よ、レイ。あれは私の下僕だもの。下僕の失敗は私の責任よ」

「あの、下僕って……一応あなたの騎士なんですけど。しかもなんで失敗することが確定しているような雰囲気になってるんですか」

侍女の姿のままのルイは自分の境遇を内心嘆きながら、無駄だと分かっていてもリノルアースの言葉を訂正する。

「いやだわルイ。冗談よ。ヘタレでも仕事はきちんとできる男だって分かってるわ。じゃなきゃ雇っている意味がないもの」

そうにつこりと微笑むリノルアースは怖かった。

無言でいいからとつと行けよ、と言っている。

「……国王陛下。男物の服を貸していただけますか。それと案内役侍女姿のままアドルバードを迎えに行くなど、一生の恥だ。むしろこんな動きにくい格好で乗馬なんて出来ない。

「すぐ用意しよう」

同性であるカルヴァだけが少々同情的な目で見て、侍女を呼んで用意させる。

宣言どおりすぐに侍女が持ってきた服を片手に、ルイは退出する。リノルアースの前で着替えをする気はないし、愛用の剣は部屋に置いたままだ。手元にあるのは隠し持っている短剣等のみ。これで出

発するのは心もとない。

「では着替えてきます、リノル様。準備が出来次第すぐに向かいますので」

「着替えたら一度こちらに戻りなさい、ルイ」

着替えたらそのまま出発しようと思っていたルイは、はい、と答えながらも首を傾げた。早く行けと言ったり、一度顔を出せと言ったり、相変わらず気まぐれな姫だ。

ルイが部屋から退出した後で、レイはわずかに微笑みながらリノルアースを見つめる。その視線に気づいたリノルアースが照れ隠しに怒る姿は実に可愛らしかった。

アドルバードは眩しい光を浴びて目を覚ました。

少し休憩しようと思っても木にもたれて座ったまま眠ってしまったことに気がつく。追っ手に気づかれるだろうと火も熾さなかったので身体がすっかり冷え切っていた。

「……どうするか」

リノルアース姫が行方不明ともなれば城は大騒ぎになっているに違いない。急いで城に戻ろうにもここはどこかも分からない。

一度町に行つて自分の現在位置を確認する必要があった。

よいしょ、と起き上がり、自分が来た道を振り返る。

脱走してからだいぶ走つたので、そろそろ近くの町が見えてくるだろう。そこで居場所を確認してもいい。

それとも　とアドルバードは唸る。

すぐ側にいる、王都までの道のりを知っている人間を引きずり出すか。

アドルバードを見張っているのか、何なのかは分からないにしろ、アドルバードが脱走してからというもの、一人か二人の人間がついて来ていることには気づいていた。

追っ手ならばこうして無防備な状態だったアドルバードを連れ戻さないのも不自然だし、攻撃してこないものおかしい。

(カルヴァの部下 隠密、とか)

だとすれば自分の状況はすでに城のレイ達に伝わっているのだろう。あの塔に閉じ込められていた時にもおそらく身を潜めていたと考えると間違いない。

ならばなぜすぐに救出されなかったのか。

答えは簡単だ。

「俺を、またはハウゼンランドを利用するつもりだった、ってことだよなあのおっさん」

馬鹿なのか、そうでないのか分からない男だ、とアドルバードは息を吐き出した。

まあ、そんなことはどうでもいい。それよりも今重要なのは。 。
「帰ることだな、やっぱり」

アドルバードはうん、と納得した上で、懐に持っていた短剣をいじり始める。

何度かぶらぶらと揺らした後で、迷うことなく背後の木の上の、一点を狙って投げた。一度もそちらに目を向けることなく、思い切り投げる。

短剣が突き刺さった衝撃で、ひらひらと何枚か葉が舞い落ちる。

アドルバードは短剣の行く末を見て、不敵に微笑んだ。

黒い服を着た男のすぐ脇に突き刺さっている自分の短剣。

驚いたように自分を見つめてくる男。

「案内してくれよ。簡単だろ？」

そう言って微笑むアドルバードには、あの可愛らしかったリノル
アース姫の面影はまるでなかった。

第16話：女顔だからって弱いとは限らないんだよ

着替え終わったルイは、言われたとおり一度リノルアースのもとへ向かった。姉のレイのようにリノルアースに剣の誓いをたてたわけではないが、自分の主はリノルアースだと思っている。主の命令には絶対服従なのは、騎士の性さがか、それともルイの習性か。おそらく後者だろう。

「失礼します」

ノックをするが、返事はなかった。

部屋の中から明るい話し声がするから、聞こえなかったのかもしれない。ルイは一瞬考えた結果、そのまま返事を待たずに入室した。多少の無礼であっても気にする者はいない……と思ったからだ。

「もう最っ高だわ！ レイ！ やっぱりあなたってば優秀！」
リノルアースが興奮しながらレイに抱きつく。

いつもながらに、金髪の可憐な姫と銀髪の佳麗な騎士が寄り添う姿は絵になる。その場が瞬く間に華やかになるような彩りだ。レイのように輝く銀の髪が欲しいわけではないが、ルイの黒髪は、リノルアースやレイの前ではひどく地味なものに感じてしまう。いや、実際に地味なのだ。

「リノル様」

はしゃぐリノルアースに声をかけると、彼女は振り向いた。青い瞳は楽しげに輝いている。

「ルイ、早かったのね」

「早くしろとおっしゃったのはあなたですよ」

苦笑しながらルイはリノルアースの足元に跪く。小さな白い手を取り、そつとその手の甲に口付ける。

「では、出立します」

その姿は先ほどまで侍女姿でいた男とは思えないほど凛々しかった。

リノルアースは満足げに微笑み、ルイの額にそつとキスをする。目を丸くして呆然とするルイを見てリノルアースは堂々と、しかしどこか優しく命ずる。

「必ずアドルを連れて無事に帰りなさい。　　今のはおまじないみたいなものよ」

戦場に行く騎士にそうやって無事を祈ることがあるでしょう、とリノルアースが付け足す。

「ええ　まあ、はい」

「……はつきりしない返事ね」

「は、はい。この身に代えても、アドル様は必ず　　」

「馬つ鹿じゃないのっ!？」

ルイの発言にリノルアースは怒って鉄拳を振るう。何がいけないと言いたげなルイを睨みつけてリノルアースはもう一度、先ほど言った命令を繰り返した。

「アドルと一緒に、必ず無事で帰って言うてるの！　誰があんたに身体はってアドル守れなんて言うのよ!？」

怒鳴っているリノルアース顔は気のせいかな赤い気がする。

鈍感なこの騎士だけならまだしも、レイやカルヴァまでここにいるのだ。二人には完全にリノルアースの真意がばれてしまった。もともとレイには知られていたけれど。

「返事はっ!？」

リノルアースはよく怒るが、その半分は照れ隠しなのだ。ルイは知っていた。そして今こうして怒鳴っているのは、おそらくいや、間違いなく照れているからだ。

「　　はい。必ず帰ります、リノル様のもとに」

につこりと微笑んで、ルイはもう一度リノルアースの手の甲に口付けた。

自分の帰る場所はあなただから、という恥ずかしいセリフは口に出せないまま、ルイはアドルバードを迎えに、馬を走らせた。

アドルバードの前には黒衣の男が一人、立っていた。

途中から気配は二つに分かれていたから、アドルバードの狙いは正しかったのだろう。おそらくもう一人は城に、カルヴァに報告に行っているに違いない。

「気づかれていたとは思いませんでしたよ、アドルバード王子」
苦笑まじりに男は呟き、アドルバードとちらりと見た。

「正直、あの塔から出ることも出来ないだろうと、そう思っていたので。予想外でした」

「甘く見ないでもらいたいもんだな、顔はこんなだが一応は男だぞ。気配の探り方は優秀な騎士から教わった。というかあいつがよく気配を消してるから慣れたんだけど」

剣もレイの父　剣聖という称号を手に入れたハウゼンランド一の腕を持つデイク・バウアーに教わったのだ。そして日々レイと共に鍛錬を欠かさず行っている。体格で差が出来てしまう以上、技を磨くしかないということはアドルバードも痛感している。

「……王子の予想外の動きに陛下も戸惑っておられるようだ。大人しく捕らわれの姫を演じていくだされば楽にことが進んだというのに」

「アホなこと言うな。男が捕まったままじつとなんかしてられるか。大方カルヴァに不満を持つ貴族の仕業だろうが、俺を巻き込むな。自分の国のことくらい自分でどうにかしろ」

アドルバードはそう吐き捨て、男を睨みつける。

ここでもし一対一で剣を交えたら　おそらく負けるだろう。この男はアドルバードよりも強い。まして今アドルバードは唯一の武器を投げてしまったのだから無防備だ。

「どうせ新しい案を考えたんだろう？　それなら俺は用なしだ。と

つとと帰る」

あの国王が簡単に諦めるとは思えない。

「大変言いづらいのですが、アドルバード王子にはまだしばらく城に帰っていただくわけにはいかないんです」

「なんで」

「まだ、その新しい案が決まっていないので。とりあえずは城外で待機です。本物のリノルアース姫が城にいらっしやるのでいなくても騒ぎにはなりませんよ」

あんのお転婆、とアドルバードが呟く。

どこに紛れ込んでいたのか、それならアドルバードに身代わりをさせる意味はないだろう。あの妹のことだ。影でアドルバードを観察して笑っていたのだろう。

「……どうであれ、王都には戻った方がいいだろ」

「それはそうですが……アドルバード様、武器はお持ちですか？」

男の質問にアドルバードはため息を吐き出して、首を横に振った。「今投げた短剣だけ。おまえ持つてるだろ。返せ」

言った瞬間に短剣が投げられる。上手くそれを受け取って、振り返った。気配に聡い、というのは今しがた言ったばかりだ。第三者の気配に気づかないはずがない。

「もつりノルアース姫を演じる必要はないな？」

「そうですね」

短剣を握りなおし、アドルバードは自分達を囲む男達を睨みつけた。追っ手がようやく追いついたのか。

「平気ですか」

「甘くみるなって言っただろ」

に、とアドルバードは笑う。

「……まさかりノルアース姫が偽者だったとは」

追っ手の一人が信じられないとも言いたげに呟いた。アドルバードは自分の演技をそこまで信じ込まれていたのかと少し落ち込む。

「本物は今頃城で優雅に紅茶でも飲んでるよ。男で悪かったなあ！」
気にしてるんだよこっちも、と叫ぶと、男達の輪は崩れてアドルバードに襲い掛かった。長剣を持つ隠密の男よりもアドルバードの方が弱そうに見えるのだろう。

アドルバードは小柄な自分の身体を生かし、相手の懐に飛び込む。短剣を使うことなく鳩尾を思いつきり肘で殴り、勢いを殺さずに蹴り上げる。転がった剣をすぐさま拾い上げて、準備は完了だ。

「女顔だからって弱いとは限らないんだよ」

自分には少し重過ぎる剣を振るい、追っ手を倒していく。馴染みのない剣はかすかに切っ先を狂わせた。

追っ手の数は十数人。もう数人は地に伏しているものの、二人で相手するには数として不利だった。

どうする？

アドルバードが嫌な汗を流した、そのときだった。

「アドルバード様！」

目の前の男が切り倒される。

馬に乗ったその人はそのまま次々に、残っていた数人の追っ手を切り伏せてしまった。

「ルイ」

アドルバードの危機に駆けつけてきた、妹の騎士を見上げながらアドルバードは苦笑した。

「ご無事ですか」

息を切らし、馬から下りたルイに問いかけられ、アドルバードは短く平気だと答える。

もう一人、見知らぬ男がいることに気がついて、途中までアドルバードをつけていたもう一人の男だろうなと納得する。

「助かった、ルイ」

「いえ　あまり腕は落ちていないようですね」

アドルバードは苦笑しながら、適当に答えた。アルシザスに来て

からも簡単な稽古を続けていた。

本物のリノルアースが城にいるのだから、レイが来るわけにはいかなかったのだろう。

頭ではルイがやって来たことに納得している。

それでも、彼女の顔を見て安心したかった。

安心させてやりたかった。

第17話：いやあ、面白いことになりそうだな

「いったい、いつぶりだろ」

ぽつりとアドルバードが呟いた。

ルイが首を傾げて、何がですか、と問いかけてくるので答える。

すぐ側にいるのがレイではないということが、なんだか妙な気分にした。

「レイと、丸一日以上離れてることが」

ああ、とルイが納得する。昔からレイはアドルバードの影のようにつつと側にいた。姿が見えなくても呼べばすぐに来るような距離にいた。しかし今はどんなに叫んでも、その声が彼女に届くことは無い。

「そうですね。リノル様もアドル様も、僕ら以外に騎士をつけないのおかげで、こっちは年中無休です。全くもって疲れます。最後に姉さんと僕と一緒に休んだのは母の葬儀の時でした」

「一年前か」

そういえば葬儀の時もレイはあまり泣かなかった。というより、人前では一粒の涙も流さなかった。しかし影で一人きりになった時にひっそりと、声も立てずに静かに泣いていたことをアドルバードは知っていた。たぶん、ルイも気づいている。

「姉さんの場合剣の誓いをたてた騎士って段階で他と違いますからね。……寂しいんですか？」

「んなつ……そんなわけないだろ！ただ単純に、何の意味も無くそう思っただけで！！」

「そんなに動揺するとバレバレですよ、アドル様」

ルイが冷静に助言する。

その口調がレイに似ていて、アドルバードは腹が立った。

「リノルの前ではただのヘタレのくせに。むかつくぞその言い方」

「ヘタレはアドル様も同じですよ。仕方ないんです。ハウゼンラン

ドの女性は強い人ばかりなんで。特に僕の身の回りの」

アドルバードは否定できなくてただ頷いた。強いというよりは、厄介な女が多い。自分の妹にしる、自分の騎士にしる。

「姉さんは少し寂しそうだったんで、帰ったら慰めてくださいね」

ヘタレのルイに言われなくても、とアドルバードは照れ隠しに文句を言う。長年弟をしているルイが言うことに間違いはないだろう。

アドルバードと、その護衛のルイ。そして隠密の二人の男。ライとローゼルは王都に向かっていた。馬が合計で三頭なので、一番小柄なアドルバードがルイと同乗するという形になっている。

一度王都に入り、城下で待機する。隠密二人がカルヴァとリノルアースの立てた計画を聞いてきて、その後はあちらの指示に従って行動という方向で進んでいる。どうやらカルヴァ達はリノルアース姫という駒だけでなく、アドルバード王子という存在まで引っ張り出すつもりらしい。

「一連の計画はほとんど姉さんの立てたものになるようですから

まあ、一筋縄ではいきませぬね。今回の事件は姉さんもかなり怒ってますし」

「……いつも裏からしか動かないレイが表に立って指示している段階で、誘拐犯に残された選択肢はそうないぞ」

レイが本気になれば、死ぬとかそんな物騒で簡単なものじゃない。言うなれば社会的に抹消される。もう二度と祖国であろうが海外であろうが気安く出歩けなくなる。

「まあ、アルシザスも関わってくるのでそう大事にはしらないと思いますけど。姉さんが望んでいるのはアドルバード王子が見事アルシザスとの同盟を結んだという筋書きでしょうから」

いつの間にかにそんな話まで出てきたのか、とアドルバードは苦笑した。レイが立てる計画というなら、アドルバードはある程度予想できる。派手にやると宣言した以上、彼女は使えるものを駆使してやり遂げるはずだ。

明日は舞踏会が予定されていたはず。国内外に問わずたくさんの

貴人が招待されていると聞く。レイなら　おそらくカルヴァも、その機会を無駄にはしないはずだ。

そして鍵となるのはリノルアース姫と、その双子で替え玉だった自分。それにアドルバード王子という駒まで入れるとしたら　。くつ、とアドルバードは喉を鳴らした。不審げにルイが振り返り、問いかけてくる。

「どうしたんですか、アドル様」

笑いを堪えきれず、震えるアドルバードはレイの思惑の大まかな概要を予想した。おそらくほぼ間違いない。弟のルイよりも、思考に関してはアドルバードの方がよく理解している。

「いやあ、面白いことになりそうだな。ルイ」

「……はあ」

状況を把握できていないルイは、曖昧に答える。

「おまえの姉さんは最高の騎士だよ。本当に　」

リノルアースとレイは部屋に戻りながら、二人で話をしていた。

その美しい二人に目を奪われる者は少なくない、女官はレイに、そして衛兵などはリノルアースに、皆釘付けだった。リノルアースは楽しげに微笑んでいたし、それを見守る騎士の目も優しく穏やかなものだったのだ。それが何より人を惹きつけた。

しかし二人が交わす会話を聞いた者はいない。

「　本当に、レイはアドルが大好きよねえ」

「……突然何を言い出すんですか、リノル様」

有能な騎士はあまり顔色を変えることなく、冷静に答えた。つまらない反応だ、と思いなながらも、返答に少し時間がかかったということは少なからず動揺したということだろうとリノルアースは微笑む。

「だってレイの頭の中アドルでいっぱいじゃない。今だって心配してるんでしょ？」

「剣の誓いをたてた主ですから。それにリノル様に言われる筋合いはありません。アドル様に負けず劣らず、妹馬鹿でしょう」

「うふふ、それに兄馬鹿のアドルは気づいていないけど」

たった二人きりの兄妹だもの、と答えるリノルアースに羞恥心はない。アドルバードのようにシスコン呼ばわりされて顔を真っ赤に染め上げるなんて失態は犯さないのだ。

そういうものでしょうか、とレイは呟く。自分も姉弟はルイの一人きりだが、この双子のように甘やかすこともない。血の繋がりがないからというわけではなく、それが当たり前だ。もちろん信頼しているし、良い弟だとも思っている。リノルアースの前ではヘタレにしか見えないが。

「今回の我儘も、結局はアドル様のためでしょうか？」

「あら、ばれちゃった？」

小首を傾げてレイを見上げる仕草は、男なら誰でも落とせるくらいに愛らしい。

「いったい何年あなたが双子の相手をしていると思ってるんですか」

「んー……まあ、そうよね。鈍感なアドルなら騙せても、レイはそういかないって分かりきってたし。利害は一致してるものね？」

レイは主であるアドルバードの地位を固めるために、リノルアースは兄であるアドルバードが王位に就くその土台を作るために、こんな大掛かりな計画をたてることは厭わない。

ハウゼンランドの　つまり双子の父である国王の子は、アドルバードとリノルアースだけだ。しかし国王の弟と妹の子供にも王位継承権はある。特に弟一家の野心はかなりのもので、隙あらばアドルバードを蹴落とそうとしていることに、誰もが気づいている。それほどあからさまだった。

「アルシザスとの同盟は、かなりの力になる。多少の危険は伴って

も手に入れる価値はあるもの」

「同感です」

くす、とレイがわずかに微笑む。

だから二人は危険からアドルバードを遠ざけた。彼が登場するのは本番の　それも終盤に近い場面だけだ。それまでは城下にでもいてもらえばいい。

「……私ね、アドルも大事だけど、同じくらいあなたも好きよ、レイ」

「ありがとうございます」

リノルアースの、年相応の可愛らしいセリフにレイの心も和む。それ以上にレイも大事でしょう？　という意地悪な質問はしないで
おこう。

「だから、あなたに身を引かせるつもりはないの。アドルにあまりある力をつけさせて、あなたを王妃にしてもあの小うるさい貴族連中が文句言えないようにしてやるわ」

にっこりとリノルアースは微笑む。レイは思わず、半歩引いた。
アドルバードの言う黒い笑顔はこれかと冷静に思う。

「　　覚悟しておいてね？　逃がさないから」

第18話：やっぱり双子だよなあ

「今日の主役はやはりハウゼンランドのリノルアース姫でしょうな。なんでもとても可愛らしい姫だとか」

「ええ、微笑む姿は十五歳ながら大輪の薔薇のようであると詩人が詠ったそうじゃありませんか」

「まだ婚約前だというのに、アルシザスを訪問するとは 陛下と何かご関係でもあるのでしょうかねえ」

「いやいやまさか。年が離れすぎていますよ」

「分かりませんよ。恋は盲目といえますから」

もうすぐ舞踏会も始めるという頃。北国からやって来た美貌の姫について様々な噂が飛び交っていた。バーグラス卿は今日恥をかくであろう国王を想像すると笑わずにはいられない。

リノルアースを誘拐し、舞踏会当日まで監禁する予定が、思いのほかのじゃじゃ馬姫で逃げられたと聞いた時には冷や汗もかいたが、その姫がまだ城に到着していないと、買収した門番から聞いた。いくら変装していようと、あの容姿では一目につく。怪しい人物であればあるほど門番の記憶にも残るといふものだ。

この様子ではリノルアースがどんな理由で舞踏会を欠席するにせよ、周囲からは不満が出るだろう。そこで自分が誘拐されたという噂を口にすれば、一瞬にして外交問題の発生だ。

どんな小さなことでも、王を貶めるには十分だった。

部屋で舞踏会用の衣装に着替えたりノルアースは、姿見で自分の

全身を一瞥して、満足そうに微笑む。

側にいるはずのレイはいない。ハウゼンランドの侍女達もつきつきとしてリノルアースにさらに磨きをかける。

「似合うかしら？」

返ってくる答えを知りつつ、リノルアースは侍女に問いかける。

「もちろん。とつてもお似合いですわ」

「アドルは準備できたかしら」

城の外に控えている双子の兄を気にかける。一応はあれに計画のすべてがかかっているのだ。

「ご心配には及びませんよ。王子はやるときにはやる人ですから」

「もうそろそろ来る頃よね？」

アドルバードは正式にアルシザスの招待を受けて、今夜の舞踏会に出席することになっている。夕暮れには城に入るはずだ。

「そうですね、ではアドルバード様、もうそろそろ会場の方に」

リノルアースは侍女に向かって微笑む。

紺色の上着。黒いマント。縁は金で飾りつけられた男物の衣装を着て、リノルアースは見事アドルバードとなっていた。南国でこの衣装は少々暑いが、城の中は外よりも涼しいし、何より舞踏会は夜だ。舞踏会が始まるまでの少しの間、暑さに耐えているだけでいい。完璧に着飾って、リノルアースは王子にならなければいけない。

「よし、行くか」

こほん、と一つ咳払いして、リノルアースは立ち上がる。

いつもより声は低めに、堂々と王子らしく　その点だけはアドルバードよりも上手くできる自信がある。

リノルアースは重いマントを風に躍らせ、颯爽と歩き出した。

同時刻。

まさにアルシザスの城にはアドルバード王子が二人いた。リノル

アース姫として誘拐されたアドルバードは、王子として難なく城の中に入り込んだのだ。傍らには黒髪の騎士が一人。

「ハウゼンランドより参りました。アドルバード・ライオニア・アルト・ハウゼンランドです」

そう挨拶された門番も、アドルバードがまさか誘拐されたりノルアース姫だったなんて思わなかった。きちんと男物の衣装を着たアドルバードはどこからどう見ても男だったのだ。

「やっぱり双子だよなあ、そっくりだもんなあ」

そっくりなのは双子だからではなく同一人物なのだとことに、門番の男は気づかなかった。

門を通り過ぎたアドルバードはあまりにもあっけなく事が進んでいることに内心つまらないとさえ思った。

「まったく、どっか抜けてるんじゃないのか。あの門番。もう少しいざこざがあってもいいだろうに」

「止めてくださいよ。いざこざなんてごめんです。上手く計画が進まないとりノル様が不機嫌になるんですから」

そしてその八つ当たりをされるのは僕なんですよ、とルイが嘆く。「さてと、じゃあ次の行動に移るとするか？」

こき、と肩を鳴らして、アドルバードがルイを見る。こういうときの顔は本当に兄妹だな、と思うほどそっくりだ。意地悪く、そして愉快そうに。

「はい」

そしてその計画に乗って、同じように自分も微笑むのだ。どうせ今日はお祭騒ぎになるのだ。少しくらいその雰囲気酔いしれても文句は言われないだろう。

舞踏会が始まっても、注目的であるリノルアース姫は登場しな

かった。

兄であるアドルバードもそれなりに人々の視線を集めていたし、その愛らしく、年頃の少年らしい容姿に貴婦人達は騒いでいた。本当はそのアドルバードがリノルアースなのだと疑いもせず。

「バーグラス卿は愉快で仕方なかった。アドルバードは人々に、「リノルアースは体調を崩している」と言い訳しているようだった。しかし本当はこの城にいないのだと、彼は確信している。あのリノルアースの美麗な騎士も見当たらない。おそらく彼女を探しているのだろう。けなげな事だ。

「バーグラス卿！」

楽しい雰囲気壊すような、そんな声が聞こえる。貴族の仲間一人だった。慌てるように、小声で叫びながら駆け寄ってくる。

「大変ですぞ。あの、逃げ出した姫を追いかけた者達が帰ってきてまして……」

「それで？ 姫はどうした？」

それが……とさらに声を低くして、ひっそりと囁く。

「姫は男だったのですよ。そこいらの男よりもよっぽど腕が立つと事実切り倒され、今まで身動きがとれなかったそうで」

「まさか」

あの、可憐で美しい、小さな花のような姫が。

閉じ込められた塔の中で毅然と振舞っていたものの、その姿は到底男には思えない。国の為にと堂々としていた彼女は、どこからどう見ても誇りある一国の姫だった。

ちらり、とバーグラス卿はアドルバードを見た。ちょうど彼の側に黒髪の騎士が 格好がリノルアースの騎士と同じなので、おそらく彼専属の騎士なのだろうと予想できる。そつとアドルバードに囁いているところだった。

す、とアドルバードの声が聞こえる程度に近寄る。

「 失礼、妹の様子を見てまいります」

にっこりとそう微笑んで、不満げな声を出す貴婦人を宥めた。

「すぐに戻ります。それまでしばしのご辛抱を」
そう言ってマントの裾を翻し、会場を後にする。その動作は一つの無駄もない、美しいものだった。一国の王子として相応しいだけの姿だ。

仲間の一つに合図をし、気づかれないようにアドルバード王子の後をつけさせる。

いないはずの姫のもとに行くというのは口実に違いない。もしかしたら裏で国王と手を組んでいる可能性もある。

邪魔な存在は、少ないほうがいい。

第19話：私にあなたが必要なんです

舞踏会が始まる、ほんの少し前。

アドルバードは城にたやすく入り、そして自分の騎士との再会を果たした。

輝く銀色の輝きに、アドルバードは目を細めた。

自分より少し背の高い彼女を見つめて、やっと楽に呼吸できるよ
うになる。

「 ただいま」

アドルバードを見て一瞬だけ表情を緩ませた彼女に、そう話しかけた。

「 …… 出かけるとは聞いてませんよ、アドル様。 ご無事で
安心しました」

いつもの厭味にアドルバードは苦笑しながら、ごめんと呟く。

「 やっぱり俺ってどこか抜けてるみたいだ。レイがちゃんと見張っ
てくれないと、駄目だな」

離れていたのが久しぶりで、どうやって会話を繋げていただろう
かと考える。

いつも適当に話していたけれど こうして会うと、やはりレイ
は綺麗だった。たぶんアドルバードの欲目もあるのだろうけど、レ
イは月の光を集めて固めたような、濁りの無い水を凍らせたような
そんな美しさを持つ人だ。

「 お互い様です。私は何があってもあなたの側を離れてはいけ
なかった。それを失念していたのですから」

「 どこぞのお姫様じゃないんだから、そんなに過保護じゃなくても
平気だよ」

そのどこぞのお姫様こそ護衛なんて必要ないようにも思えるが。

「アドル様はきつと理解されていないんですよ」

レイがわずかに微笑んだ。

その一瞬の、貴重な笑顔をアドルバードは見逃さなかった。

「何を？」

「私という人間を、です」

まさか、とアドルバードは笑った。

彼女のことは自慢じゃないが、それなりに理解している。リノルアースよりも、場合によっては彼女の弟のルイよりも。

それでもレイは分かってないんですよ、と言う。

少し腹が立った。

「おまえのどこが理解できていないって？」

「私は、思いのほか嫉妬深いんです」

は？　と思わずアドルバードは首を傾げた。空耳だろうか。

「アドル様があまり国王陛下と親しいので少し捻くれてたんです。

私を遠ざけるような素振りもしていたし　それに、私は過保護だからあなたの側にいるんじゃないやありません」

レイはもう半ば自棄だった。

あのリノルアースが逃がさない、とそう言ったのだ。

これくらいの気持ちを言うくらいは、許されるだろう。

「私にあなたが必要なんです。アドルバード様。私が私という人間であるために」

自分は今どんな顔をしているのだろう。アドルバードの顔が赤く染まっているから、もしかしたら笑っているのかもしれない。しかしそれを確認する術もなく、するつもりもなかった。

自分の中できつく蓋を閉めて閉じ込めていた想いを少しでも吐き

出すことが出来て　ほんの少し、気持ちが悪くなったような、そんな気がした。

舞踏会の会場から、ずつとつけてくる無粋な輩に、ルイは眉を顰めた。

「リノル様」

アドルバードに扮するリノルアースにだけ聞こえるように、そつと囁く。

その存在にリノルアース自身もとくに気づいていたのか、そうね、とだけ答えた。男の姿でそう話すのはかなり違和感があった。

「片付けてしまいなさい、ルイ。遠慮を知らない男は嫌いよ」

予想通りの反応に、ルイは答えず、腰の剣に触れる。このままついて来られると、本物のアドルバードと鉢合わせになってしまう。それは避けたいことだ。

「リノル様、先に行かないでください」

「あら、どうして？」

たまには良いところを見せたいから　なんて言ったら確実に怒られるだろう。

「まだ他にもいるかもしれませんから。アドル様の二の舞になってもらったら困ります」

そんなの間抜けじゃないわ、と文句を言いつつ、リノルアースは足を止める。目だけで早くしろとルイを急かしていた。

これだからこそそのリノルアースだが　とルイはため息を零しつつ剣を抜く。

気配を消して、来た道に戻る。数メートル先の曲がり角で貴族の男を見つけ、素早く切っ先を首筋に向けた。

「これは驚いた。アルシザスの貴族のようですが。まさかアド

ルバード様を追いかけてきたのが男性とは。あいにく主にそういう趣味はないのですか？」

そう冗談半分で話しながらも、ルイの目はまったく笑っていないかった。

しり込みした男が待て、と言って慌て始める。

「リ、リノルアース姫がどうなってもいいのか！？ 姫が行方不明なのは知っているだろう！？」 私に何かあれば姫の身も

「いやだ、可笑しいわねえ」

アドルバードの姿のまま、リノルアースはくすくすと笑い始める。その声はまさに鈴の音のような、可愛らしい少女の声だ。男の目が驚きで見開かれる。

「私はここにいてよ？ どのリノルアース姫が行方不明なのかしら？」

リノルアースはそう言いながら、かつらを取った。

ふわりと、柔らかな金の髪が下ろされ、リノルアースの背中を覆う。

「リノル様」

ルイが低く注意する。ここでリノルアースがばらしてしまっただけのためにここでこの男を相手にしようとしたのか分からない。

「いいじゃない、ルイ。この方には少し夢でも見てもらおうんだから。目を覚ました頃にはすべて終わってるわ」

そうですね、とルイは答えながら、男の鳩尾に拳を入れる。剣はもともとここで使うつもりはない。

う、と少し唸りながら男が前のめりになると、首の後ろに手刀をお見舞いする。気絶させるにはこれが一番早くて簡単だ。

「鮮やかねえ。さすが私の騎士」

にっこりと満足そうに微笑むリノルアースに、ルイは眩しそうに目を細める。

「あなたの剣ですから。強いだけでは足りないでしょう?」
もちろん、とリノルアースは即答する。

「でもあなたはそのままでもいいわ。ルイ」

予想外のリノルアースのセリフに、ルイは目を丸くする。

そんな少し間抜けなルイの顔を見つめながら、リノルアースがくすくすと笑う。

だって　これ以上にかっこ良くなればたら、面倒じゃないの。

そう言えば必ずこの騎士を有頂天にさせるだろう言葉は、意地悪な姫の奥底に隠されたまま、伝えられることは無かった。

第20話：耳の穴かっぱじってよく聞きなさい？

賑やかな舞踏会の会場では、不穏な噂が流れていた。一向に姿を現さない北国の双子を待ちかねてのことだろう。もちろん噂の出所はあまり喜ばしいところではない。

「聞きました？ リノルアース姫が行方不明だと」

「ええ、それで急遽兄君をお呼びになったとか。双子だから服装を変えて入れ替われると」

「一人二役を演じると？ お伽話じゃあるまいし」

バーグラス卿は口元を歪めて、その噂にさらなる尾ひれをつける。

「私はこう聞きましたよ、リノルアース姫は男だと」

まさか、と笑い飛ばす者の方が多かった。

一目でもあの姫を見れば、どれだけ美しく可憐な姫か分かるというものだ。

しかしこの会場に来て、一度もリノルアースを見ていない者の方が多い。美しいという噂を聞いているだけで、その美貌がどれほどものか知らない人間は、もしかして、と疑う者もあった。

空耳だったのだろうか。

『私にあなたが必要なんです。アドルバード様。私が私という人間であるために』

それは、どんなに情熱的な告白もかすんでしまつような、言葉だった。

いや、でもちよつと待て。好きだという意味ではないかもしれない。なんていうか人として必要とされているだけで。恋愛とかそういうものとは違うのかも。

「アドルってホントにお馬鹿よねえ」

耳まで真っ赤にしたアドルバードをしみじみと眺めながら、リノルアースは呟く。

その声でアドルバードは現実に舞い戻り、きよるきよると周囲を見回した。部屋にいたのは男物の服を着たリノルアースと、その側に控えるルイだけだ。

「あ、あれっ!? レイは? ていうかりノル、おまえなあ!」

積みり積もつた質問と不満をリノルアースにぶつけようとすると、口を塞がれた。

「文句言わないでよ。男らしくない。とっととその服脱いで。着替えるから。ああ、あとレイは準備に向かつてるわ」

そう言いながらリノルアースがアドルバードの服を剥ぎ取ることをする。

「女の子が男の服を剥ぐな! ていうか計画そのものの説明がまだ!」

「派手にやるってレイから聞かなかつた?」

「それだけだ! どんだけ抽象的なんだよ! ていうかおまえやレイがいたらそれだけで十分に派手だ!」

「あら、ありがとう」

「褒めてるんじゃない!!」

褒めなさいよ、というリノルアースの文句を無視して、アドルバードは上着を自分で脱いだ。リノルアースが侍女を呼んで、隣室に行く。彼女も着替えなければならない。

「 ていうか馬鹿って言われなかったか、俺」
「 言われました」

アドルバードの着替えを手伝っていたルイが即答する。
隣室から出てきた侍女が服を置いていった。どうやらリノルアースが先ほどまで来ていた『アドルバード』の服を着るらしい。

「 なんで？」

「 なんでと言われても……あそこまで言われて気づかないんじゃないあ鈍感を通り越してアホか馬鹿ですよ」

アドルバードは首を傾げる。

そして少しの間で何度も反芻したレイの言葉を思い出す。

「 おっおまえら立ち聞きっ……！」

「 偶然聞いたんですよ。我が姉ながら惚れ惚れしますよ。あの人の生き方には。まあ実際昔は本気で惚れてましたけど」

さら、と爆弾発言を落とされてアドルバードは絶句した。

「 きよっ姉弟だろう！？」

動揺して声が裏返ってしまった。

「 血は繋がってないってご存知でしょう？ 初恋です。俺の。懐かしいなあ」

ルイは遠い目をして呟く。

「 し、知ってるけど。初恋というと何年前だ……？」

「 さあ。そんなに気にしないでください。本当に小さい頃の話です。ちなみにリノルアース様の初恋も姉さんです。モテますねえ」
のんびりと、そう呟くルイを見ながらアドルバードの心臓はあまりの衝撃にいつもの倍の速さで脈を打っていた。

「 リ、リノルまでっ……！！？」

「 安心してください。昔の話です。……今はリノル様一筋です」

後半は、隣室にいる本人に聞かれないように少し声量が落とされていた。

それについて口にするのは、既にアドルバードに気づかれているので気にしていないようだ。

「まったく、男が女よりも支度に時間がかかるってどうなのかしら」

突然降ってきた鈴の音のような声に、アドルバードもルイも驚いて一瞬硬直した。

そこには美しい深紅のドレスを着て、髪を見事に結い上げているリノルアースの姿があった。まさに大輪の花のような、生きた宝石のような美しい姫だ。

「リ、リノル」

「さっさと着替えてよ。とりあえずリノルアース姫とアドルバード王子は同時に姿を見せなければいけないんだから」

男の着替えを見るなどか何でそんなに偉そうなんだ一応俺は兄なんだぞとか、言いたいことは山ほどあったのだが、それよりもまず先に聞かなければならないことがある。

「……いいかげん、計画を説明してくれ」

ため息を零しながら、アドルバードは服を着始める。

めんどくさいわね、と呟いて、リノルアースは説明を放棄しようとした。いつもの説明役のレイはまだいない。準備とはなんだろうか、と思いつながらすぐ側に彼女がいないことが寂しい。

「一回しか言わないから、耳の穴かっぼじってよく聞きなさい？」

悪巧みを考えているときのリノルアースの笑顔は、とても輝いているとアドルバードは苦笑して、一度だけ頷いた。

レイが考え、リノルアースと計画したという作戦の内容は、おおまかには予想できていた。リノルアースに聞いたのは確認のようなものだ。

アドルバードはリノルアースの手をとり、エスコートしながら舞

踏会の会場まで戻る。

双子の姿は誰よりも目立つ。似た容姿の、まったく異なるようで同じような二人は実に神秘的で、魅力的だ。本性を知らない者からすれば、の話だが。

「ああ、そうだ。言い忘れてたわ」

会場まであと数歩、というところでリノルアースが呟く。

「……なんだよ」

リノルアースの言うことはいつもとんでもないことばかりだ。アドルバードが警戒しながら問うと、リノルアースはにっこりと微笑んで、自分よりも少し背の高いアドルバードを見上げる。

「実はね、ご褒美があるの。頑張ってるね？」

「アルシザスとの同盟だろ」

ルイから聞いた、とアドルバードがつまらなさげに答えると、リノルアースは首を振る。

「まさか。あんなものと一緒にしないで。あれは手に入れて当然のものですよ」

「あんなものって……」

小国のハウゼンランドにとって、大国との同盟はかなり凄惨なことなのだ、それをあんなものと言えるほどの褒美とはなんなのだろう。

「まあ、終わるまでは内緒よ。楽しみにしてて」

そう言っただけで笑うリノルアースの顔は、何か企んでいる時の顔だ。

アドルバードは一步身を引き、苦笑いする。

「ほら、しゃんとして」

目の前にはもう輝かしい社交の場が広がっている。

今から現れるだろう二人はかなりの注目を浴びるだろう。

アドルバードは腹をくくり、リノルアースと並んで自分の戦場に足を踏み入れた。

第21話：男としてここは奪い返さないと

現れたアドルバードとリノルアースの姿に、誰もが目を奪われた。赤みがかつた艶のある美しい金の髪、ハウゼンランドの雪を思わせる白く透き通った肌、そしてどこまでも深く青い大きな瞳。その完璧ともいえる容姿の人間が、この世に二人もいるのだ。

「なんて可愛らしい……人形のような」

「ああして二人そろうと宗教画のようだな」

ほう、と人々がため息を零す。南国のアルシザスにはない、二人の容姿はこの国の人にとって羨むものだ。

ただ一人、呆然としていたのはあのバーグラス卿だ。

なぜここに二人存在しているのか、彼には理解できなかった。

誘拐したリノルアース姫に逃げられこそはしたが、この城に侵入などさせていないはずなのに、と口を開けて双子を見つめる。

理想の姫の微笑を浮かべながら、リノルアースは目が合うアルシザスの貴族に微笑んだ。

「ざまあみろ、ね」

微笑んだまま、リノルアースは愕然とするバーグラス卿を見て呟いた。

「あの人で間違いないんでしょう？ アドル」

流れ始めたワルツにのって二人ダンスをしながらリノルアースは問いかけた。

アドルバードは突っ立っている中年の男性を見て、頷く。閉じ込められていた塔で少し顔をあわせただけが、忘れるはずがない。仕返する奴リストで現在トップを独走中だ。

「ああ、あのおっさんだ。いっそ清々しいほどに驚いてるなあ」

「まあ、あの人にしてみれば天が崩れ落ちるくらいにありえないことなんじゃないのかしら。でもアドル。それだけであの人が引き下がるかしら？」

くす、と意味ありげにリノルアースは微笑んでアドルバードを見上げた。

「野心家みただからな、この後何か起こす気だったんだろ」

「ふふ、それに便乗するのが私達の作戦だもの、起こしてくれなきや」

一曲踊り終えると、二人は壁際へ向かう。

二人揃うと近寄りがなくなるのか、リノルアース目当ての男性も、アドルバードに媚を売ろうとする女性もやってこない。周りが静か
でいい。

「ところでカルヴァアは」

「ああ、そこにいるわ。淑女のエスコートをお願いしてたのよ」

淑女？ とアドルバードが繰り返して呟く。

遠目に国王であるカルヴァアらしき人を見つけ、その隣にいる女性に驚愕した。青いドレスを着た、長身の女性だった。肌は白く、髪は月光のような銀色で その人を、アドルバードが見間違っはなかつた。

「レレレレレ、レイっ!？」

いつも男性の格好をしているレイが、何年ぶりかにドレスを着ていた。髪はかつらだろうか、長く背にかかるほどで、よく見れば何人も男性が狙っているようだった。

「あんの野郎、人のもんには手を出さないって言ってたくせにっ!

あいつの毒牙にかかる前にレイを助けないと!」

そう意気込んで自分の騎士の下へ駆け寄ろうとするアドルバードの腕をリノルアースがすかさず掴む。

「ちよっとお兄様? レイの綺麗な格好に悩殺されちゃったのは分かるけど、暴走は止めてくれない? ていうか妹の私がそこらへんの男の毒牙にかかったらどうしてくれるのよ」

「おまえなら一人で平気だろ？」

「レイだって平気よ。剣はドレスの下に隠してあるもの、男何人いたってレイなら大丈夫でしょ」

レイの剣の腕はハウゼンランドでもかなりのものだ。動きにくいドレスを着ていたとしても、そこらにいる男に負けるわけがない。

「でも、ほら、男としてここは奪い返さない」と

「奪われてないから、奪い返さなくていいの。だいたい男としてなんて言うならとっとと婚約でもなんでもしちやいなさいよね、女々しい」

「お、男に女々しい言うな！」

顔を真っ赤にして怒るアドルバードに、リノルアースはため息を零す。

「女々しいもんは女々しいのよ。ご褒美は後でちゃんとおあげるから、今は大人しくしてなさい」

「ご褒美って……まさかレイのことだったのか？」

アドルバードの問いに、リノルアースはけろりとして至極当然のことのように答える。

「そうよ？　だってアドルならもらって一番喜ぶのはレイでしょう？」

「物扱いするな。ていうかレイはもらうとか以前に俺のだし」

「物扱いしてるのはどっちよ。誰のおかげであんなに綺麗に着飾ったレイが見れると思ってるの？　けっこつ渋ったんだから」

それはそうだ。レイは女らしい格好は嫌いだから。

アドルバードは遠くにいるレイをちらりと見て、やっぱり綺麗だなあ、と思う。

「いつもあんな格好してればいいのに。別に普通のレイでも構わないだけだよ。でもせめて髪くらい……綺麗だったのに」

「アドル。思考がただ漏れだから黙りなさい」

リノルアースが頭を押さえながら、アドルバードの脇腹をつついた。

「……そういえばおまえの初恋もレイだって聞いたぞ、ルイから」
「あら、気づいてなかったの」

さら、と肯定されて、アドルバードはどう切り替えしていいのか迷った。

「だって、小さい頃は男の子だと思ったんだもの。あんなに綺麗な男の子がいるなんて感激しちゃったわ。アドルよりよっぽど王子様みたいだったし。まあ、そのうち女の子だって分かって玉砕したわけだけど」

レイとは幼い頃からの付き合いだ。

アドルバードもリノルアースも、物心ついた頃に彼女と出会い、いわば二人にとって最初の友人だ。

「まあ、レイは小さい頃から男の格好してたし」

綺麗な銀の髪は背中を覆うほどに長かったが、それをいつも一つに束ねていた。

「そうね　だからまあ私としてもアドルの恋を応援してるのよ？
レイが将来お姉様になるなんて最高に素敵だわ」

「……どうも」

につこりと微笑むリノルアースは実に黒い。狙った獲物は逃がさない猛禽類を思わせる眼光の鋭さに、アドルバードは苦笑いする。

「おまえに惚れられた男は苦労するんだろっなあ……」

将来の姉候補に挙がっているレイですらこれほどの勢いで捕らえようとしているのだ、自分の相手となったらリノルアースは今以上に本気を出すのだろう。

「そうでもないわ。まあ、からかうのが楽しいからついねえ」

「そうか。まあならいいけど……って良くない！！　いるのか！？　惚れた男が！？　どこの馬の骨だこの野郎！」

今まであまり自分の恋愛に関しては興味を示していないようだったリノルアースの爆弾発言にアドルバードは動揺した。

「静かにしてよ。みっともない」

「静かになんてできるか。どこのどいつだ？」

「やめてよもう……気づかないアドルが馬鹿なのよ」

レイにはばれてるし、と呟かれ、アドルバードは本気で後でレイに聞いてみようかと考える。そんなことすればリノルアースから鉄拳を食らうことになるだろうが。

唸りながら妹の恋路を心配する兄馬鹿っぷりを発揮していると、窓ガラスが大きな音をたてて割れた。

反射的にリノルアースを背に庇う。

貴婦人達の悲鳴が飛び交う中、散ったガラスを踏みしめながらバ
ーグラス卿が狂ったように

笑っていた。

ら、女性の肺活量は凄いものだ。アドルバードは感心してしまった。
「か弱い姫を誘拐するような方が素晴らしい貴族というのなら、アルシザスという国は噂に聞くほど良い国ではありませんのね」

アドルバードの背に隠れていたリノルアースが、その鈴のように可憐な声でそう高らかに言う。混乱しながらも、貴婦人よりは動揺していない貴族の男性からはどよめきが生まれた。

「お久しぶりですわ、誘拐犯様。高い塔に捕らえていた姫君がこうしてあなたの前に現れてさぞかし驚かれていますでしょう？ あいにく、ハウゼンランドの女性は皆様が思うほどか弱くありませんわよ」
リノルアースが挑発するように微笑む。後半のセリフにはアドルバードも激しく頷きたい。

「国とためなどと声高々に言う者の中に、本当にそう思っている者がいるのかしら？ 国のため、民の為と言って実際は己の為なのではなくて？」

「随分と口達者な姫君だ」
にやりと、バーグラス卿は口を歪めて笑う。

「口は災いのもとと言いますよ。美しい姫君。あなたもその兄君も、それが原因でここで命を落とす」

それが引き金となり、バーグラス卿の後ろにいた男達がリノルアースに襲い掛かる。

「リノル、下がってろ」
低くアドルバードが呟き、剣を抜く。

慣れ親しんだ、自分の剣だ。重みも、長さも、すべてが自分の思うように動かす為に作られたもの。小柄なアドルバードからは想像も出来ないような鋭い剣捌きに、悲鳴を上げ続けていた貴婦人も思わず見とれる。

「ルイ！」

リノルアースが自分の騎士を呼ぶ。

どこに隠れていたのか 美しい姫君の騎士は、颯爽と現れて無

礼な男達を切り伏せる。穏やかに微笑みながらリノルアースを見つめるルイは、その顔を崩すことなく、一人も男をリノルアースに近づけまいと剣を振るう。

「……来るのが少し遅いわ」

リノルアースが文句を言うのと、ルイは苦笑した。

「申し訳ありません。呼ぶまで出てくるなと命じられていたので」
もちろん命じたのはリノルアースだ。しかしいざという時にはすぐに声が出なかつただなんて言えず、ついルイに八つ当たりしてしまふ。

「　　レイー!!」

アドルバードが声を上げる。

二人の男に守られているリノルアースよりも、丸腰のカルヴァアに男達は狙いを定めた。彼らには無防備に見えるのだらう。カルヴァアの側には美しい女性が一人いるだけだ。

彼女が、アドルバードよりも、ルイよりも強い騎士なのだとは知らない。

「死ねえええええっ!!」

獣のような叫びと共に、五人の男がカルヴァアに向かって剣を向ける。

カルヴァアはそんな状況でも、自信に満ちた微笑を浮かべている。

「お下がりにください、陛下」

涼しげなレイの声が、カルヴァアにだけ届く。

青いドレスの裾がひらりと揺れる。男達は突然前に現れた女性に動揺しないわけがなかった。

そしてその隙を、レイが見逃すはずがない。ドレスの裾が一度、広がる。レイの綺麗な足がかなり露出したが、ほんの一瞬の出来事だった。一瞬でレイは剣を抜き　そして一番目の前の男を瞬く間に切り伏せる。

それから、ほんの数秒だった。

舞うようにレイが動く。ドレスがそれをなおさら美しく演出していた。

誰もが目を疑った。事実を知るアドルバードと、リノルアース、レイとカルヴァ以外は、美しい女性が五人もの男を一瞬で倒してしまったことが信じられなかった。

「さすが、と言うべきかな。騎士殿」

動きにくいはずのドレスを苦もなく着こなし、寸分の狂いもなく剣を振るう。レイの剣は無駄がなく、潔い。

「恐れ入ります」

さて、とカルヴァが一步前に歩み出る。

勝利を確信していたはずの男達は、思いがけない敗北に呆然としていた。

「自分の手柄にしようとしたのがいかんな。ここでそこらへんの輩を雇っていれば多少言い逃れは出来ただろうに。まあ、雇う金もなかったか。貴殿らの汚い金はかなり巻き上げたからな。それを想定して貴殿らを招待したのだがね。バーグラス、ヘルナンド、デイル、ゴーシュ、ルイズ、カルナド、ジュールゴニー、ニルベナ、カナルベリ、ラドニ、ミスヴィアンテ、ええと……そこで気絶しているのはサドニスか？ まったく、嘆かわしい。まだいるじゃないか」

貴族の名を次々に上げていくカルヴァは、やはり演技のように肩を竦めてみせた。

事のすべてを見届けている貴婦人と、貴族はほとんどカルヴァの手中の者だ。彼らには証人になってもらはねばならない。

「これにて一件落着。協力感謝する、アドルバード王子、リノルアース姫」

カルヴァが満足そうに微笑み、アドルバードは苦笑しながら剣をしまつ。

そつと側に歩み寄ってきたレイに微笑みかける。彼女の綺麗なドレスも、アドルバードも衣装も少し血がついて汚れてしまっている。それでも彼女の美しさは変わらないと　アドルバードはそう思った。

もう少し長い方がいいけど」

「長い髪は手入れも面倒だし邪魔なので個人的にはあまり好きではありませんが　もう二年短いままでしたし、アドル様が喜ぶのでしたら、伸ばしましょう」

煮え切らないアドルバードに飽きたのか、レイがきつぱりと決断を下す。

そして思い出したようにレイが、そういえばと呟く。首を傾げているアドルバードに向かって、レイは珍しく皮肉も憂いもなく綺麗に微笑んだ。

「随分を腕を上げましたね。アドル様」

その綺麗な微笑に、アドルバードが赤い顔をさらに赤く染め上げる。滅多に笑わない人間が時々不意をつくように笑うのはズルイ。

「え、あ、そ　そうか？」

「ええ、隙も随分と少なくなりましたし　速くなりました。しっかりと鍛錬をしている成果ですね」

そりゃあ好きな女に守られるなんて情けないから、越えることは無理でもせめて肩を並べるくらいに強くなりたいと思うじゃないか　ぶつぶつとアドルバードが口籠もる。まったく、レイは鋭いのか鈍感なのかさっぱり分からない。

「まったく、恋は盲目とはまさにこのことを言うのだからな」

真っ赤になりながら動揺しているアドルバードに、先ほどまでの勇ましい余韻は微塵もない。剣を振るう姿だけを見ていれば身長の違いも女顔なのも気にならないほど凜々しいというのに　残念なことだとカルヴァはため息を吐く。

「まあ、それがアドルの良さですもの。招待客は皆様お帰りになりましたわよ、国王陛下」

リノルアースが興味なさげに兵によって締め上げられていく貴族

達を見る。大半はアドルバードやレイ、もしくはルイにのされてしまっていて意識はない。ささやかに顔を隠していた仮面も剥がされて素顔が曝されている。ほとんど年配の男だった。

「確かにあの尋常じゃない純情ぶりは希少価値も高いと思うが男があれで良いと思うかね？」

「ハウゼンランドの女性は皆しつかり者ですもの。男が多少ヘタレでも問題ありません」

言いながらリノルアースはちらりと後片付けに徹している自分の騎士を見る。あれもどちらかと言えばヘタレなのだろう。要領が悪いし、自分の前ではおどおどしてばかりだし。時々見せる力強さをもう少し表に出してもいいのに、とリノルアースは思う。それで他の女に目をつけられるようになるかと困るから考えものだが。

「姫や騎士殿がしつかりしているのは認めるとも。ああ、それこそ問題ない！」

「……あなたは馬鹿なんだか賢いんだか分からない人ですわね、ほんとうに」

はああああ、と長いため息を吐き出してリノルアースが頭を押さえる。

「馬鹿と天才は紙一重だからな」

「自分で言いますか、そこ。私のセリフじゃありません？」

「どちらかというと姫は私を馬鹿にしているような気がするのだが気のせいかね？」

「いいえ、たぶん気のせいではありませんわ。紛れもなく事実です。ご安心ください、馬鹿は兄で慣れてますから」

「……それは安心していいとは思いますが。」

「まあ、それを理解できる程度の知能はおありなんですね？」

「……なんとというかリノルアース姫。私のことがお嫌いかな？」

あちらこちらに棘のあるリノルアースの言葉に、カルヴァの勢い

も思わず萎んでいく。

「いえまあ暑苦しい馬鹿は嫌いですわ。ええ」

「それはつまり肯定だろうか？」

「さあ、どうでしょう。お好きにとつてくださって結構です。あなたとこれから親しくするのはアドルであって私じゃありませんもの」
リノルアースはにつこりと、それは美しく微笑んでいるが、明らかにそれはカルヴァを遠まわしに拒絶していた。

どこで嫌われたんだろうか、とカルヴァはため息を吐き出す。世の美しいものを素で愛でている彼にしてみれば心外だし、少々辛い。

「まあ……約束通り、アドルバード王子とは親しくさせていただきますよ。これからも、ね」

「当然ですわ。守らない約束を 守るつもりのない約束を、自分の利益のために簡単にしてしまうような馬鹿は大嫌いです」

大嫌いには昇格せずにすみそうだと、カルヴァは苦笑する。

「あああああああああつ！」

穏やかな雰囲気を取り戻しつつあった会場に、男の叫び声が上がった。

一番呆然として、大人しかったバーグラス卿に縄をかけようとした衛兵が、体当たりされ、バーグラス卿は言葉を成さない音を叫んだ。

一番近くにいたアドルバードが捕らえようとするが、バーグラス卿はわき目も振らずに全力で走った。 一人の女性のもとに。

「！ エネロア！！」

真剣なカルヴァの声にリノルアースは目を丸くする。

黒い髪を一つに束ね、眼鏡をかけた カルヴァの秘書官だった

だろうか。招待客はすべて帰ったが、事後処理のために彼女は会場に残っていた。

この場で一番、か弱い女性は誰かと問われれば誰もが彼女を指すだろう。

バーグラス卿はどこに隠し持っていたのか　短剣をエネロアの細く白い首筋にあて、口の端をあげて笑う。

バーグラス卿にしてみれば、一番手薄で攻略しやすい女性を選んだのだろう。彼はカルヴァの常ならぬ様子に気づいていないのが、幸いだった。

第24話：花はあんたにやるからな

少しのところで、間に合わなかった。

アドルバードは歯がゆく思いながら、バーグラス卿を睨みつける。短剣は、ほんの少し力を入れればすぐにでもエネロアの首筋を切り裂いてしまっただろう。誰もが焦るなか、当本人のエネロアだけは冷静だった。

「……そこまで堕ちたか、バーグラス」

低く、唸るようなカルヴァの声。バーグラス卿を睨みつける目は鋭く、それを見たアドルバードの背筋は凍りついた。

恋愛に関しては疎い方だが　ここまではつきりしていれば、アドルバードにでも容易に分かる。カルヴァにとってエネロアは特別なのだ。自分にとってのレイがそうであるように。

「おまえが欲しいのはこの命か。ならばくれてやる。その汚い手をどける」

何を言い出すのか　誰もが声を失った。ただ一人不敵に微笑むバーグラス卿以外は。

「その場で自ら死んでください、陛下。剣ならばそこいらに転がっているでしょう。そうすれば、この婦人も解放しますよ」

「　彼女の安全を確認させないつもりか」

苦笑しながらも、カルヴァは一番近くに転がっていた剣を拾い上げた。まさか本気かと、アドルバードは自分の目を疑った。

「どうぞ、首でも、胸でも、お好きなのところを刺して死んでください。あなたはアルシザスに必要な」

につこりと微笑みながらそう言うバーグラス卿は、もはや人としての理性は欠片も残っていないようだ。その微笑を見るたびに、悪寒がする。

カルヴァは黙って、剣についた血を服の袖で拭う。

「おい、まさか本気かおまえっ!？」

さすがに見過ぎすわけにはいかないとアドルバードが叫ぶ。

カルヴァはらしくもない弱々しい微笑みを浮かべて、ただアドルバードを見つめた。

気持ちは分かる。痛いほどに。もし自分が、レイを盾にとられたら そんなことは万が一にもありえない気がする 命は惜しくない。彼女を守りたい、それは自分が常に思うことだから。

しかし、それは国王として正しいのか。

「……何を、するおつもりですか。陛下」

ぴたりと、カルヴァの動きが止まる。

首筋に短剣を突きつけられても、エネロアは怯える素振りも見せなかった。彼女はただカルヴァを睨みつけて、怒っている。

「何を、と言われてもね。エネロア。君を救おうとしているんじゃないか」

「あなたの脳は屑ですか。それとも砂ですか。ああ 腐って中身が全部なくなりましたか。嘆かわしいことです」

思いも寄らない毒舌っぷりに、アドルバードだけではなく、妹も、二人の騎士も絶句した。アルシザスの者にしてみれば普通なのか、衛兵は皆ただカルヴァの自殺行為が止められたことに安堵している。

「……エネロア。そこは嘘でも『私のために死ぬなんて馬鹿な真似はよして』と可愛らしく言うところではないのかね」

「とても馬鹿な行為ではありませんね。一国の王がたかが一人の女のために自害ですか。馬鹿馬鹿しくて笑えません。美談にもなりませんよ」

「美談ではないか!！」

「どこがだ、と内心でアドルバードはつつこむ。おまえの感覚は可笑しい。」

この状況に似合わない二人の会話に、バーグラス卿も口を挟む余地がない。

「黙れ！ 早くしろ！ 早く死ね！」

丁寧な口調も吹き飛び、バーグラス卿が叫びだした。

短剣の先がかすかにエネロアの首筋を傷つけ、赤い鮮血が白い肌を伝う。

傍目から見ても分かるほど、カルヴァの顔が蒼白になる。気づかないバーグラス卿は馬鹿なのか狂っているのか。

「……………陛下」

エネロアが呟く。

それ以上は何も言わない。それでも何かはカルヴァに伝わっているようだった。

「……………アドル様、動けますか」

真剣なレイの声に、アドルバードは顔を上げた。

バーグラス卿はもはや策も何もなく、眼中にあるのはカルヴァだけだった。他の人間が口を開いても気づく気配はない。バーグラス卿に一番近いのはアドルバードとレイだ。その次にカルヴァ。リノルアースとレイは遠いので戦力に数えない。

「狙えますね？」

すつと渡された短剣を受け取る。広がるドレスの中に武器を隠す場所などいくらでもあるということか。

一度頷き、短剣を握る。

長剣を扱うより、こちらの方がアドルバードには合っていた。体が小さく筋力もそれほどないからだ。

「国王陛下。花はあんにやるからな」

アドルバードはそう声高く宣言した瞬間に　　バーグラス卿の手

の甲に短剣が突き刺さる。

「うがあああっ！」

続けてアドルバードが投げた短剣はバーグラス卿の足、腕に命中し、拘束が緩んだ隙にエネロアは駆け出す。

カルヴァは迷うことなく、自分を貫く予定だった長剣をバーグラス卿に突きつけた。その顔に、表情はない。冷たいハウゼンランドの雪さえも凍りつくような、静かな殺意だけがそこにある。

「実に残念だ。残念だが　もはや許す気にもなれん。死をもって償え、バーグラス」

ルイが咄嗟にリノルアースを抱きかかえるように目を覆った。人が斬られ、命を落とす瞬間を見せて良いはずがない。

リノルアースも、人が斬られる瞬間はいくらでも見た。しかしそれは命を落とすほどのものではなかった。先ほどの乱闘でさえ、レイモルイも　アドルバードも、致命傷を与えない程度に戦っていたのだ。

「貴様に国王たる器はない。我々貴族を蔑ろにする王に明日はない。貴様はいずれアルシザスを滅ぼすのだ」

バーグラス卿は叫び、それはやがて絶叫に変わる。ルイの腕の中でリノルアースがびく、と震えた。耳も塞いでいるもの　聞こえてしまうのだろうか。

「……………陛下」

エネロアがカルヴァの背中に声をかける。

ゆっくりと振り返ったカルヴァは、らしくない弱々しい微笑みを浮かべていた。エネロアの白い手がそつとカルヴァの頬に伸ばされる。

そして。

ぱし、と乾いた音が響いた。
叩かれたのだ。

「なんですかその情けない顔は！ 一国の王がそんな面いつまでもぶら下げてないでしっかりしなさい！！」

一瞬呆然としていたカルヴァも、く、と笑い出した。

なんて遠まわしな励ましだろう。カルヴァがそつとエネロアの首に触れ、流れる血を拭った。それほど大きな傷ではない。痕すら残らないだろう。

「傷つけてしまったな。傷一つつけたくはなかったのだが」

「……名誉の負傷です。何をかっこつけているんですか」

エネロアの切り替えしに、カルヴァはまた笑う。

殺伐とした雰囲気もエネロアの説教で消え去ってしまったようだ。

「私のせいで怪我するのは名誉かね？」

馬鹿なことを、と呟きながらエネロアは踵を返し、会場の事後処理を始める。頬が少し赤いのは気のせいだろうかとカルヴァは微笑む。

「……あなたは、アルシザスの王ですから」

エネロアの小さな呟きは、誰の耳にも届かない。

第25話：あなたの剣は誰のためにあるの

「リノル様、こつちです」

ルイは自分の手でリノルアースの目を隠したまま、広い会場の外へと連れ出した。

庭の噴水の縁にリノルアースを座らせる。夜風が思いのほか冷たかったので上着を脱いでリノルアースの肩にかけた。俯いて、何も言わないあたり、やはり女の子なんだなと思う。人が殺される瞬間などこの姫君は一生見ることも、聞くこともなかったろう。

バーグラス卿の遺体は会場に残されている。すぐに片付けられるだろうが、そんなものすら彼女の目に入れるわけにはいかない。どうせアドルバードも、レイも同じように采配するだろう。

「……………大丈夫ですか？」

ルイは膝をつき、リノルアースを覗き込むように問いかけた。うつすらと涙ぐんでいるように見えるのは、気のせいではないだろう。いくら腹黒くて策略家で性格がちよつと問題ありだとしても、リノルアースはまだ十五歳の、姫なのだ。何年も剣を習い、そして人を斬った経験のあるアドルバードとはそこが決定的に違う。

まして騎士であるレイや、ルイとは比べられるはずがない。レイも同じ女性だが、彼女の場合、主のためならば人を殺すことくらい眉一つ動かさずにやってのけるだろう。人が死ぬ瞬間も、ずっと前に見たことがあるはず。

ハウゼンランドは比較的穏やかな国だ。だからといって争いがまゐるでないわけではない。騎士という立場である以上、血を流し、人が倒れる場面に立ち会うことは少なくない。

「……………怖いですか？」

剣を握り、人を殺せる自分が。

あなたのためなら、人を斬ることに迷いなど見せない騎士が。

「怖くないわ。怖くなんかない」

リノルアースは即答した。その頑なな表情に、ルイは苦笑する。

「無理しなくていいですよ？」

怖いはずだ。

冷静に、顔色を変えず人を傷つけることのできる自分が。その後で変わらず微笑むことのできる自分が。

「無理なんてしてない。馬鹿にしないで。あなたを怖いと思うことはあなたに対する侮辱よ。あなたの剣は誰のためにあるの」

きつ、とリノルアースはルイを睨みつける。

ああ、この人は本当に綺麗だ。

「我が姫のために。リノルアース様」

剣の誓いはたてていない。本当ならルイは、国のために、王家のためにと答えなければいけない。しかし、嘘はつけない。

いつも、どんな時も、この強くて弱い姫のために。それだけのために。

「私のために振るわれる剣を、拒んだりしないわ」

毅然としてそう言うが、リノルアースの目にはまだ涙が浮かんでいる。人が斬られる場面は平気でも、人が死ぬ瞬間は衝撃的だったのだろう。

その強い瞳を見て　ああ、抱きしめたいな　なんて無礼なことを考える。もちろん考えるだけで実行はできないが。

きつとこの人は、一人になって泣くんだろうな。もしかしたら、兄には泣き顔を見せるのかもしれない。けれど、きつと自分には見せてくれない。どうせ泣くなら、この腕に閉じ込めて、その中で泣かせてあげたいのに。この人はそれを許さないだろう。騎士に甘えることを認めないだろう。

「私を守ってくれてありがとう、ルイ」

いつになく素直なりノルアースに、ルイは苦笑する。

「それが、自分の使命ですから」

あなたに仕えていることが、自分の誇りだから

「……………リノルは？」
周囲の雰囲気も落ち着き、縛り上げられた男達が運ばれていく。
バーグラス卿の遺体も片付けられた。

あんな場面を見てしまったのだから、きつと怯えている。強が
ってはいるけれど、リノルアースは普通の女の子なのだ。心配にな
ってアドルバードがきよろきよろとあの美しい姫を探す。

「ルイが連れ出したみたいです。心配ありませんよ」
その様子を見ていたらしいレイがそう答える。

人が切り殺される瞬間にルイがリノルアースの目を塞いだと聞い
て、ほっとした反面、響き渡る断末魔は嫌でも耳に残ってしまった
だろうと唸る。

「やっぱり俺もいこうかな……………」

そう呟いてリノルアースを探しに行こうとするアドルバードを、
レイが止める。

「ルイ一人で充分です。むしろ少しは気をきかせてやってください」
「リノルが弱っているところにつけこんでルイがリノルを襲ったり
したらどうする！」

「そんな甲斐性があるならいいですけどね。姉として万が一にもあ
りえないと断言します。それにリノル様も弱っていてもルイに襲わ

れるような人じゃないでしょう」

わざと襲われて責任をとれと言い張ることはあるかもしれないが、どちらにせよここでアドルバードが二人のところに駆けつけて、邪魔されたと思うのはルイだけではないはずだ。

「……カルヴァのところに行ったら邪魔だろうな」

ちらりと盗み見ると、カルヴァとエネロアは側にはいないもの入り込めない雰囲気がある。ここでアドルバードが近寄れば邪魔者になるか、またはカルヴァののろけを聞く破目になりそうだ。それはごめん被る。

「私と一緒にいるのは嫌ですか」

「まさか」

考えるよりも先に言葉が出る。アドルバードはそれに自分で驚き、レイにも簡単にばれてしまい、レイはかすかに微笑む。

「……………レイ、聞いてもいいか」

「何でしょう」

「その……………」

いざ聞こうと思うと、上手く声にならない。

『私にあなたが必要なんです。アドルバード様。私が私という人間であるために』

あれは、どういう意味だ？

アドルバード、と略さずに呼ばれる時は怒っている時か、真剣な時で。。。

「……………私は、あなたにだけは嘘を言いませんよ」

アドルバードの様子を見て、レイが心の中まで見えているのではないかというタイミングでそう囁く。

お互いかけがえのない存在で、大事なものは確かだ。それはどんなことよりも信じられる。

「どんな形でもいいんです、アドル様。あなたの側にいられるなら……………具体的に理由を教えてください、と言ったら教えてくれるのか？」

レイはお望みならば、とさりと答える。

しかし女の口から先に言わせるのはさすがに卑怯だろうか。それにどうせレイにはすべてお見通しなのだ。アドルバードの気持ちさえも。

「今は言うな。言おうと思った時に俺が……おまえ今身長いくつだ？」

ちらりとレイを見上げながらアドルバードが眉間に皺を寄せる。デカイ。

「172cmです」

「……………おまえの背を越してから言う」

アドルバードは帰国したら背が高くなる方法を探ろうと決意した。現在アドルバードは157cmだ。レイとの身長差は実に15cmにも及ぶ。レイなんてレイよりも背が高いから、20cmくらいは違うかもしれない。

男として惚れた女よりは背が高くありたい。幸いアドルバードの成長期はまだまだ終わりそうにないし、遺伝的にもそんなに小柄な男は少ない……はず。

「では私は何年待てばいいんでしょうか」

「厭味か？ 厭味だよな？ それ」

アドルバードがレイを見上げながら睨みつける。レイがいつもよりも少し踵の高い靴を履いているせいで身長差はさらに広がっている。

ふて腐れた様子のアドルバードを見てレイはかすかに微笑む。残念なことにその笑顔をアドルバードは見る事ができなかった。

「早く、伸びてくださいね」

待ってますから。

そのレイの言葉にアドルバードが撃墜されたことは、彼の林檎の

よつに赤く染め上がった顔を見れば誰の目にも明らかだった。

第26話：恋で人は馬鹿になるんですかね

ハウゼンランドの、肌寒くも感じる冷たい風が恋しい。

昨晚の騒ぎが嘘のように穏やかな、静かな昼下がりで。

アルシザスの訪問期間も、残りわずかとなった。当初よりも長くなっただから寂しいなんて感情は芽生えなかった。

むしろ。

「意外と地味な趣味だと思っっているのだろう？ 馬鹿を言っただけじゃない。エネロアは密かに実はかなり美人だ。あれだ、眼鏡をはずしたらびっくりってやつだ。いつも目立たない格好ばかりしているから気づかないがな。しかしまああれでいい。うるさい男に目をつけられても困るしな。エネロアの美しさは私だけが知っていればいいのだよ」

「……うぜえ」

本物のリノルアースがいて、女装からも息苦しいコルセットから解放されたアドルバードの口は滑りやすくなった。

あの事件の後、アドルバードもリノルアースも同盟の話の余地だけでも作っておくために数日間滞在を延長した。といっても二、三日なのでのこりわずかであることは事実だ。もともとの予定では今日帰るはずだった。

しかしアドルバードとカルヴァの間で話されることといえば政治的なものなど皆無の、カルヴァのノロケというかただの馬鹿話というのが現状だ。

「あの騎士殿など足元にも及ばないぞ！ エネロアの美しさは！

世界一だ！」

「ばっ……馬鹿言うな！ レイのがよっぽど綺麗だ！ いつもはあんなんでも男にも見えるけどドレス着たらっ！ おまえだって見ただ

る!？」

「服に依存した美しさは真の美しさではないよ。やはりどんなものを着ていても輝くというのが真の美であってだな」

「おまえの目が可笑しいんだよ!!」

「失敬な! これでも見る目には自信があるのだが!」

二人の馬鹿な言い争いを眺めながら、ルイは紅茶を飲む。

男だけの話、というわけでレイではなくルイが借り出されてしまった。借り出したのはもちろんリノルアースだ。

なんとというか。

「恋は盲目っていうか。恋で人は馬鹿になるんですかね」

意外と切れ者の国王も、それなりに賢く将来有望なはずの王子もこれではただのアホか馬鹿か。

「人を馬鹿にするな! おまえだって意見があるだろ!？」

もちろんルイの主張としてはリノルアースを押すところだが、この二人のように不毛な言い争いはしない。姉のレイが綺麗だということはもちろん、間近で見ただけではないがここまでカルヴァが主張するのならエネロアも綺麗な人なだろう。

「別にどうでもいいです、そういう決着のない話は。俺にとってはリノル様がもちろん世界一ですけど。それは口に出さなくてもいいことですよ」

むしろリノルアースは綺麗という言葉よりもまだ可憐とか愛らしとか、そういう言葉が似合う年頃だ。

「むむむ。なかなか言うな」

「それほどでも。明らかに相思相愛の奴らを見ると腹が立つんです。リノルアースは自分に弱いところを見せてくれない。

慰めることを許してくれない。

「んーまあ、その。双子の兄である俺にはリノルの考えてることは分からないしなあ。何とも言えん。レイあたりはお見通しなんだろ

うけど教えてくれないだろうし」

「望みがまるでないわけではないかもしれないぞ？　なんて優しいように悲しい慰めに、ルイはますます落ち込んだ。

「万が一、リノル様と俺が両思いでもいいんですか、アドル様は」

「それ俺に聞くか？　意味ないだろ。リノルが誰かを本気で好きだったら俺が反対しようが親が反対しようが実力でねじ伏せるだろ」
「……想像できてしまうから怖いです」

ルイがため息を零す。

確かに泣いて認めてくれと懇願するリノルアースよりも、自分の力で出来る限りの方法で完膚なきまでに周囲を納得させるリノルアースの方が容易に想像できてしまう。自分の想像力が恐ろしくなるほどリアルに。

「そこのおっさんみたいな男なら断固反対だけど、まあおまえならマシだろ。馬鹿がつくほど真面目だし」

「こら。一応国王なんだが私は。おっさんはないだろおっさんは。私はまだ若いぞ」

カルヴァがささやかに反論するが、アドルバードもルイも無視した。

「マシってなんですかマシって。ヘタレのくせに」

「おまえ王子に向かってそんな口きくか！！」

「王子なら王子らしくしてくださいよ。姉さんの尻に敷かれてるくせに」

「言うな！　惚れた弱味ってやつだ！」

それ大声で言うことじゃないですよ、とルイは助言する。惚れた弱味なら、きつと姉のほうがそれなんじゃないかと思っただが、あえて言わないでおく。

「いいかげんに同盟の話をしてください。ちゃんとまとめておかないと文句を言われるのは俺なんです」

主にリノルアースとレイに。つまり最悪最強の二人に。

「う、それはその、今やろうと……」

「そういう面倒な話は外交官にすべて任せてしまえばいい」
なぜか胸を張ってそう偉そうに言うカルヴァの背後に、冷気が漂う。

寒気がしてカルヴァは硬直し、その背後を凝視しているルイとアドルバードは苦笑した。

「……真面目になさるといっているので陛下にすべて任せたくはありますが、私の記憶違いでしょうか？」

「エ エネロア」

髪を一つにきっちり束ねたエネロアはカルヴァを睨みつける。
蛇に睨まれた蛙というのはまさに今のカルヴァのようなものことだろう。

「やはり見張りがいないといけませんね、私も同席させていただきました」

「いや、大丈夫だとも！ さっきから議論が白熱していてだな」
「では内容をお聞きしても問題ありませんね？」

カルヴァの白々しい嘘を見破って、エネロアが追撃する。カルヴァは案の定言葉を詰まらせた。まさかエネロアとレイのどちらが綺麗か言い争っていたかなんて言えるはずがない。

黙りこんだカルヴァの反応を見てエネロアがため息を零す。

「見え透いた嘘を言うのは止めてください。陛下。早く同盟の件を話してください」

嘘ではないのだが、とカルヴァは呟く。その呟きを無視してエネロアはアドルバードを一瞥する。

「な、なにか？」

「時間もあまりないので、お早めにまとめてください。わざわざハウゼンランドから何度もご足労おかけするわけには参りませんので」
言葉は丁寧だが、カルヴァと同類と扱われたのでアドルバードは少なからずシヨックを受ける。

「……はい」

アドルバードとしても何度も何度もアルシザスに来るなんて面倒はごめんだ。

それにエネロアがいる限りノロケ話には発展しないだろう。本人を目の前にすると一国の国王も意外とへたれだ。

生暖かい南国の風がアドルバードの金の髪を揺らした。

甘い花の香りがどこからかともなく漂う、温かな気候。

今頃のハウゼンランドは短すぎる夏の終わりで、秋の気配を感じさせる冷たい風が吹いているだろう。

来た頃よりはこのアルシザスにも慣れ、嫌いではなくなったが、早く帰りたいとアドルバードは窓の向こうの遠い故郷に思いを馳せた。

第27話：だから、警戒しろって言ったんだよ

「お疲れですね、アドル様」

就寝前に、着替えもせずベットの倒れこんだアドルバードを見てレイが苦笑する。

いつもなら行儀が悪いと怒るところなのだが、今日は大目に見てくれるようだ。

「疲れた。もうヤダ。早く帰りたい」

「……明後日には帰れるじゃないですか」

同盟の話を目に始めれば長く議論になり、カルヴァもあれで賢い男なものだからアドルバードも何度も言い負かされそうになり

結果、疲労困憊だ。精神的に。

「さ、早くお休みになりたいのなら着替えてください。そのまま寝ないで」

そう言いながらレイは強引にアドルバードを起こす。間近に迫ったレイの顔を見上げて、触れたいと思ってしまった自分を叱り付けた。

まだ駄目だ。まだ彼女に相応しくなれてない。

「……アドル様？」

レイがアドルバードの顔を覗きこむように、呼びかける。

顔を逸らして理性を保とうとしたというのに、タイミングの悪い。

「おまえな、少しは警戒するとかしろよ」

自分よりも強い相手にそんなこと言うのは可笑しいだろうか。しかし今この瞬間のレイは恐ろしいほどに無防備だ。

「今更何を言うのかと思えば……昔は私が添い寝しないと寝付かない子供だったくせに」

久しぶりに敬語じゃないレイに少し驚きながらも、アドルバード

は必死で反論する。

「そ、それは本当に小さい頃の話だろ!? 俺はこれでも十五歳で、もうすぐ十六だぞ!？」

「それが何か問題でも? だったら身長のことなんて気にしなければいいものを」

「気になるんだよ男としては!！」

自分が彼女と並んでも、お世辞にもお似合いだとは思えない。

気高く美しい彼女に劣らない、相応しい男になろうと、二年前のあの時に誓ったのだ。 何に? 自分自身にだ。

「いつもいつもおまえに守ってもらって、助けてもらって、支えてもらって 俺はおまえに何もしてやれてない。そんなんじや駄目なんだ」

俯いて唇を噛むアドルバードを見て、レイがため息を零す。

「何度、言えばいいんですか?」

怒ったような、悲しんでいるような、そんな響きの呟きにアドルバードは反射的に顔をあげてレイを見つめた。

「何もしなくてもいいんです。そのままです。あなたはただこうして私の側にいてくれるだけで。それだけで私の心を支えてるんです。あなたを守るのも、支えるのも、全部私がしたくてしてることなんですから」

そのままレイはアドルバードの肩に額を押し付け、黙り込んだ。

どうしたらいいものかとアドルバードは困り果てる。レイは時々、こういうふうに人の心臓に悪いことを言ってくる。早死にしたらレイのせいだ。

悩んだ末、そっとレイを抱きしめた。

剣を振るう彼女は思っていたよりも華奢だった。柔らかくて温かい。明らかに男とは違う。レイは強くて弱い。相反する二つが彼女の中で両立している。誰にも弱いところなんて見せない。常に冷静で強く気高くある。けれど たまに自分の弱さをしまい込んでいる蓋が、開いてしまう。たぶんいつも開けてるのはアドルバードだ。

「……言っとくけどやっぱりおまえの身長を抜くまでは、言わないからな」

「……どうしてそこまでこだわるんですか」

男のプライドだ、と答えるとレイが吹き出した。そして小声でくだらない、と言っただ。

何がくだらないか、と怒りが湧き上がるがそこは堪えた。

「なら、私も何も言いません。女から言わせるような男ではないでしょう？」

「……待ってます」

いじらしいそのセリフに、アドルバードの心臓は再び打ち抜かれる。

ああもつだから凶悪なんだよ、この女。

いつも主導権はあっちにあるのに、こういう場面でそんな可愛いと思ってしまうようなこと言っつなよ。襲うぞ本気で。

「と、いうわけなのでこれも私を慰めてくださった、と解釈しますよ？ 就寝前に寝室にいると襲われるようなのでこれからは侍女に

「うえ！？ ちょっと……ま、待った！ 何それ！？」

アドルバードの腕の中から逃れようとするレイを必死で食い止める。

どういふ展開でそういふ話になるんだ！？

「少しは警戒しろと言っつたのはアドル様でしょう」

力を込めて逃がすまいとするアドルバードの耳元でレイがそう囁く。

確かに言っつたけど。確実に言っつたけど！！

就寝前というのは数少ない誰にも邪魔されずに二人きりでいられる時間なわけで。そしてこの状況すらなかったことにするってどうよ、とアドルバードは泣きたくなつた。近年稀に見る急接近だつたと思っつんですけど。

「……おまえがその気ならこっちにも考えがあるぞ」

どうせ何もなかったとされるなら。

レイを抱きしめる腕の力を強く　壊れてしまっただけではないかと思っただけに、強く抱きしめる。最初は本当に慰めるつもりだったからそれほど力は込めていない。

襲ってもいけないのに警戒されて遠ざかるというのなら。

「アドル様っ!？」

耳元で聞こえるレイの声を無視して、もう一度強く抱きしめゆるりと解放したその頬にそっと触れる。

「だから、警戒しろって言ったんだよ」

怒ったように低く呟かれる言葉。

問いかけようとしたレイの口を、自分のそれで塞いだ。反射的に逃げようとするレイを再び腕の中に閉じ込める。年下で小柄だとかへタレだとかで油断していたレイが悪い。腕に覚えがあるせいか、彼女はあまりにも無防備だ。

お世辞にも優しいキスではなかったと思う。経験不足はアドルバードもレイも同じだ。

時々甘い吐息が唇にかかる。レイの身体が硬直していた。

まあ単純に考えてもレイにこんな経験があるとは思えない。小さい頃からずっとアドルバードにつきつきりだったのだから。悪い虫なんて寄せ付けない。

襲ってもいけないのに警戒されるなら、襲って警戒されるほうがマシだ。

どん、とアドルバードを突き飛ばし、レイがアドルバードの腕の中から脱出する。

見上げるとレイが可笑しくなりに顔を真っ赤にして、困ったようにアドルバードを見ていた。何か言いたいのかも知れないが、レイの口が何度か言葉をなさずに動いている。

あ、やりすぎたかも。

そんなことを思ったのは、レイが何も言わずに部屋から走り去った後だった。

しかしあと一、二年　下手すればそれ以上、アドルバードの身長がレイを追い越すまでオアズケされるのだから、これくらいのこととしても許されるのではないか。……許してほしい。

「あー……やっちゃった」

天井を見上げてアドルバードはため息を吐き出す。

これで長年の信頼関係は崩れてしまっただろうか。それともろいものではないと信じているけど　信じたいけど。

彼女は冷静で、意外と嫉妬深くて、強くて弱くて、綺麗で可愛い。いいかげん我慢するのも辛いんだと彼女に言っても分からないだろうか。

誘拐されていた、実際はそう長くない短い期間でどれほど彼女に会いたかったか。

自分以外の男の隣に綺麗な格好で立たれてどれほど腹が立ったか。

レイだって分かってない。

アドルバードのことをちっとも。

自分が、どれほどレイが好きなのか。

第28話：生殺しかこの野郎

「何しやがったんですか人の姉に」

ぼんやりと天井を見つめていたアドルバードの視界に、ルイが現れた。

ああ、リノルの部屋に行ったのか　と頭で理解しながらルイの顔を見る。怒っているような気がしないでもない。

「ちょ　　っと、理性がなくなった」

「殺していいですか」

かなり低く呟かれた声に一応、抵抗する。

「だって、あれはさあ……凶悪っていうか。もう無理。あれは無理。我慢とか無理。ただ俺オアズケされるわけ」

無理ーと騒ぐアドルバードを見て、ルイはため息を吐き出す。もしかすれば男として同情の余地はあるかもしれない、と少しだけ考えて怒りを抑える。

「……詳しい話を聴かせてください。拒否権はないですよ？」

「いいけど。レイは」

「リノル様の部屋にいます。何も話してませんよ、姉さんは。あんな顔の姉さん初めて見ました」

「あー可愛いよね、あれ」

耳や首筋まで真っ赤にしたレイを思い出してアドルバードは思わず本音を零した。

「見てんですか、日ごろから」

「いや、さっき出て行く一瞬に見ただけ。レイがあんな顔しよっちゆうするわけないじゃん」

かいつまんで状況を説明すると、ルイは複雑な表情を浮かべて唸った。

「気持ちはこちらからですよ、こつちのことも少しは考えろって気分にもなりますよ。舐めてんのかと怒りたくなりますよ」

理解してくれているというよりも、自分の私情を語りだしたルイにアドルバードはとりあえず釘を刺す。

「……リノルに手え出したら殴るぞ」

「じゃあ俺も殴っていいですか」

そつという理屈になるか。

それも嫌だと思いつながらアドルバードはため息を吐き出した。

「だってさあ、身長越すまでそついうのナシって何？ って感じだろ？ 生殺しかこの野郎」

「あー……まあ、そつですね。姉さんって鋭いのか鈍いのか分かりませんよねえ。気持ちとしてはちよつとした悪戯のつもりだったんでしょけどね。その就寝前どうのつていうのは。だってアドル様もですけど、姉さんだってそつ長く我慢できませんよ。アドル様が誘拐されている間、かなり機嫌は悪いは国王に剣は向けるわ大変でしたから」

「……そんなことしてたのか、あいつ」

いくらあのアホな国王とはいえ、剣を向けるなんて。普通なら罰せられるに決まってる。

「癪ですけど、姉さんもアドル様と一緒にいないと駄目なんですよ」

「……本人から言われたことある」

それを思い出して、アドルバードの顔は自然と赤くなる。

その様子を見逃さなかったルイは半ば八つ当たりのようにアドルバードを睨みつけた。

「どうせ両思いなんだからいいじゃないですか。こつちはいいように使われているわりに実るかどうかも分からないんですから」

「あー……まあ、その、なんだ。望みがないわけじゃないと思うぞ？」

気休めにもならないかもしれないが、アドルバードが慰めるようにルイの肩を叩く。

「大体どうして強がるんですか。ものすごく怖かったです。怯えてたくせに。俺のことなんて気にしないで泣けばいいじゃないですか。なんですか、俺に泣き顔を見せるのはそんなに嫌ですか！」

「落ち着けルイ」

舞踏会の騒ぎの時の話なのだろう、二人きりにしてやったがあまり意味はなかったのだろうかとアドルバードはため息を吐く。

「リノルは誰にも泣き顔なんて見せないぞ。俺だってもう何年も見てないし。あいつは強がってないと不安みたいだから、仕方ないんだよ」

「だからって、人が殺されたのを見た後くらい、素直に泣けばいいじゃないですか！ それは恥じゃないでしょう！」

普通の姫ならそんな場面には巡り合わず、もっと穏やかに守られているはずだ。リノルアースももとはそちら側の人だった。

「だから強がりなんだって。あの場で泣くような人間はリノルしかいなかったら？ エネロアさんだってレイだって怖がってもいなかったし。そんな中で自分だけ泣くのはリノルのプライドが許さなかったんだって」

リノルアースのプライドは空よりも高い。それはルイも充分に理解しているつもりだ。

でも泣いて欲しかった、というのはいけないのだろうか。

「……気持ちは分かるよ。俺だってレイに弱いところを見せて欲しいと思うし。でもレイもあれだからさあ」

「……一回くらい理性無視してもいいですか」

あのレイがあんなに動揺したのだから、リノルアースの意外な一面を見ることが出来るかもしれない、なんて下心と別に考える。

「リノルの同意ナシには駄目」

「……アドル様だって同意ナシだったくせに」

「あー……まあ、それはそれ、これはこれ」

第一、いくら不意をついたとはいえ、レイが本気を出せばもっと早くにアドルバードを突き飛ばすことが出来たはず、と考えてしま

うのは思いあがりだろうか。嫌だったのではなくて驚いただけなんて解釈はやはり間違いだろうか。

問おうにも本人が逃げてしまったので答えは闇に紛れたままだ。

静かにやって来たレイの顔は、可笑しくらいに真っ赤だった。

普通の人ならさほど気にならないほどのことでも、レイだと異常事態だった。

何があつたのかと問いかけても本人は何もないと黙り込んだまま。レイの顔の熱は未だに治まらず、頬を赤く染めている。

仕方ないのでルイに事情聴取に向かわせ、リノルアースは夜着の上さらに一枚着込み、侍女には紅茶を頼んだ。寝ようと思ったのにとんだ邪魔……もとい、面白いネタが転がり込んできたものだ。

「いいかげん白状なさいな。何があつたの」

「何も」
ないわけではないでしょう、なんなのあなたのその顔。というやり取りはこれで何回目だろうか。

「どうせ、アドルが何かやらかしたんでしょう。キスでもされた？」
がしゃん、と音をたててティーカップが落下した。紅茶はさほど入っていないかったので火傷の心配はなさそうだ。

「 凶星ね」

レイがこんなにも分かりやすい反応をするとは思わなかった。

「まあ、アドルもよく今まで我慢してきたわねえ。だーいすきな人がいつも側にいるんだもの。時々むらっとくることくらいあるでしょうよ」

「ア、アドル様はまだ十五歳で」

「恋愛に年齢が関係ある？ 女は下手すりゃ十五歳で嫁ぐのよ？」

男だっている気になるお年頃でしょうよ」

十五歳の少女とは思えないセリフに珍しくレイが戸惑った。恋愛

ことになれば恐らく四人の中でレイが一番未熟かもしれない。

「それなら余計に就寝前は避けた方がいいんじゃない……」

ぼつりと、レイが零す。

今回のことで、ああいう状況では上手く身体が動かないということが証明されている。

「……どうでもいいからとつと部屋に戻りなさい。私もう眠いの嫌だったならアドルの横っ面を殴り飛ばしやいのよ」

嫌じゃなかった時の対処法は教えてくれないまま、リノルアースはレイを部屋から放り出した。

途方にくれたレイが、ルイが戻ってくるまでその場に立ち尽くしていたことは言うまでもない。

第29話：やられたらやり返せと教育されてるので

一通り愚痴を零すとルイは帰ってしまった。

レイは戻ってくるだろうか　代わりにリノルアースが正義の鉄槌と言って殴りこみに来る可能性の方が高い気がする。

明日とか、どうなるんだろう。

「あー……どうせならもつと堪能しておけば」

警戒しろと言いつつ実際警戒されると動きにくいことこの上ない。いつもレイは影のようにアドルバードの側にいたから、いないとどことなく不安だった。

警戒心を強められた状態であんな機会に巡りあうのは一体何年後だろう。

後悔はしてない。謝る気もない。

いつもいつも、自分の気持ちに気づきながら無視して、かわし続けた彼女にささやかな復讐だ。

部屋の扉の前で立ち尽くしたまま、今夜はこの部屋に入らないほうが身のためかもしれないとレイは少し本気で思った。

しかしいつもアドルバードの眠る部屋の隣室である控えの間で眠っていたレイに寝室は用意されていない。リノルアースの部屋からも追い出されてしまった。

助言通りに殴った方がいいだろうかと真剣に悩みながら、かれこれ数十分が経過しようとしていた。

もともと女らしい感情とは無縁のまま育ったものだから、こういう時にどうしたらいいのかさっぱり分からない。

ただ一つ分かることは。

「このままは、私らしくないか」

苦笑してレイは扉をノックした。
まさかあんな後でアドルバードも暢気に寝ていないだろう。
昔から、アドルバードはカッコいいと褒めてくれたのだから。そ
れに見合う自分でいたい。

「入りますよ、アドル様」

返事がないのでレイは有無を言わず扉を開けた。
その声が自分でも驚くほどに冷静だったので今まで培われてきた
ものに感謝しなくなった。赤く火照った頬も長いこと廊下にいたこ
とで治まったようだ。

主は目を丸くして自分を見てきた。何を驚くのか。

「……今夜は、戻ってこないかと思った」

「私に野宿しろと？」

「い、いや、リノルの部屋とかに泊まってくるかなと」

「追い出されましたよ」

リノルアースの鉄拳からは逃れられたかとアドルバードはほつと
息を吐く。

レイはベットの脇のテーブルに置きっぱなしになっていた本を片
付け始めていた。あまりにもいつもどおりの様子に少し腹立つ。気
にならないのか、アレは。

しかしレイは手ごろな本を一冊右手に持つと、それでアドルバ
ードの頭を殴った。

「どわっ！ な、何するんだよ！」

「リノル様に嫌だったなら殴つとけと言われたので」

本当は拳で横っ面を殴れと言われたんですけど、とレイが付け加
える。それなら本で叩かれたほうが幾分かました。角でなかったか
ら騒ぐほど痛くもない。

それよりシヨクなのは。

「……………嫌だったわけか」

一応は相思相愛だと思つてたけどまさかそれも勘違いじゃあないだろうか。

「嫌、というより……………私の身長を越してからと言つたのはアドル様でしょう。現状ではあなたは私の主であつて恋人ではないわけですし。ああいうことをするのは間違つてませんか？」

「でもほら、恋人じゃなくても親しい奴同士なら」

「友愛の意味でされたのなら文句は言いませんけど、違つてしょう？」

はい、まったくもつて違います。

そう思いながら言うのは恥ずかしいのでアドルバードは俯いた。

「ていうか友愛なら他の男にされてもいいのかっ！！」

「誰がそんなこと言いました。大体他の男なら接近してきた時点で蹴り倒してます」

あっさりと言ひ返されてアドルバードは言葉に詰まる。

それは言い換えればアドルバードは許されるのだ、友愛の意味だけでの、主従関係を超えない意味のキスは。他の男なら蹴り倒されるのにもかかわらず。しかし主従関係でキスできる機会なんてそう転がっていない。

「……………おまえさ、ホントにそういうことをさらつと言うなよ。こつちの身にもなれつて」

時々本当に凶悪なほどに可愛い。

「代われるのなら代わりますけど、無理です」

「そういう意味じゃない。男心を理解してくれつてことで頭を抱えながらアドルバードがため息を吐く。

「男ではないのでそれも無理です」

夜着を持つてきてレイがきつぱりと言ひ切る。男になれつて言うてるんじゃないんだから無理じゃないだろ。

「自分で着替える。おまえはもう休んで……………」

あんなことの後で着替えを手伝ってもらうなんて出来ない、そう
思っ夜着を受け取りながら、もう休んでいいと言おうとしたのに、
最後まで言う前に、唇に柔らかい何かが軽く触れる。
銀の髪が目の前できらきらと輝いていた。

ちよつと待て。

「では、私はもう下がりますね。おやすみなさいませ、アドル様」
レイは顔色を少しも変えず、むしろ何事もなかったかのように優
雅に一礼する。

やり逃げか!!

「レレレレレレっっっレイ!?!」

「何ですか」

手の甲で口を押さえる。

微かに残るぬくもりと感触が一瞬の出来事が嘘ではないと証明し
ていた。

「お、おまつ……まだ駄目って言ったくせに!!」

「仕返しです。やられたらやり返せと教育されてるので」

「んなっ」

顔を真っ赤にしてアドルバードは口籠もる。

そんなことはやり返さなくていい!! ていうかもつ本で殴った
だろうが!!

そう言おうと思うのに口が上手く動かない。不意打ちにはめっほ
う弱かった。心臓が可笑しなくらいにバクバクと跳ね上がっている。

「同盟の件が上手くまとまったらご褒美にもう一回してあげますよ」
くす、と微かに微笑みながらレイが控えの間に消えていく。

壁一枚の距離が憎い。

「……………俺は馬か」

そしてキスはニンジンか何かか。

形勢逆転だ。

明らかに負けてる。

分かりやすいご褒美につられてる自分が情けない。

「あー……これを逃したら次はいつかな」

天井を仰ぎながらアドルバードが呟く。

もちろんこの機会を逃すなんてそんな馬鹿なこととはするつもりはないけど。

「頑張りますか」

最終話：もう勸弁してくれ

つつ！！！！！

「まったく彼女はだな、花のように可憐でありそして……」

「ノロケ聞きに来てるんじゃないって何度言わせるんだこのアホ！

！ 同盟の話だろうが！！」

「真面目だな何があつた？」

「報告の義務はない！！」

「あつたんだな！？ 何があつた！！」

「あ つつ！ もう黙れ！！ このアホ国王！！」

「ご褒美が効果あつたのか、同盟の話はアドルバードの帰国の日ま
では固まり、どうにか一行は懐かしい北国ハウゼンランドに向け
て出立した。

「いつでも来たまえ！ 歓迎するぞ！」

大きく腕を広げてその胸に飛び込んで来いと言わんばかりのカル
ヴアにアドルバードは心底うんざりした。

「……もう二度とごめんだ」

ノロケノロケの毎日。朝から晩まで話し合い。いろんな意味です
ごく辛かった。

アドルバードはカルヴアを無視して馬車に乗り込もうとしたのだ
が、運悪く捕まり出立の前にあの筋肉質の国王の腕に抱きしめられ
たのはトラウマになりそうだ。

同盟は思いのほかハウゼンランドに有利な形となった。何故だと
カルヴアに問いかければにこやかに、そしてアホらしく笑いながら
断言した。

「美しいものは人類の宝だからな！ ハウゼンランドには美しいも
のが多いらしい！！」

その美しいものが双子とその騎士であることは明確だった。どうやらあの変態国王に気に入られてしまったらしい。不幸な事に。

「風景が変わったな。もうすぐか」

馬車の中で外を眺めながらアドルバードが呟く。

南国特有の極彩色の景色はもう見えない。懐かしい常緑樹の森が視界に入り込んできた。

「久しぶりですね」

レイも目を細めながら外の風景を眺めた。これほど長く国を離れていたことはないから、感動も大きい。

「それより、レイ」

「何ですか」

「もらってないぞ」

「何をですか」

窓の向こうを見つめたままレイは端的に答える。

「おまえ誤魔化すつもりだったな!？」

「だから何をですか」

「ああもうほら! 何の話しているか分かりませんって顔しやがって!」

「馬車の中で暴れないで下さい、アドル様」

「暴れさせてるのは誰だ!」

こちらら踊らされると分かりつつあのずる賢い国王と対決しながら話をまとめあげたっていうのに!!

「……こんなところでさせる気ですか」

レイがぼつりと呟く。

可愛いと思ってしまうその一言にアドルバードは間違いなく撃ち抜かれた。

「二人きりだし」

リノルアースとルイは後続の馬車の中だ。

レイはため息を吐き出した。どうやら諦めたらしい。

アドルバードは手を伸ばしてレイの頬に触れる。がたがたと馬車が揺れるな、と思ってやっぱり別の場所にすれば良かったかも今更ながらに思う。

ああ、こうしていると恋人同士みたいなのに。

アドルバードが妥協すれば関係は今すぐにも恋人に塗り変わるのに、身長がコンプレックスである以上そこは無視できないところらしい。

柔らかい唇に触れる。

初めての時よりは優しく、長く。そのぬくもりを忘れないように。次はいつになるか分からない。

こんなご褒美があるなら、女装も何も悪くないかもしれない。

久しぶりに見る我が家（という名の王城）に着き、ようやく帰ってきたと実感できた。

頬に感じる風は冷たく、南国のあの生暖かい風とは似ても似つかない。どこからか漂う香りも違う。やはり故郷の方が落ち着く。

寛大な両親に挨拶して、その腕に双子はいつぺんに抱きしめられてこれも愛情と我慢する。

「レイとルイもご苦労だった。今日はゆっくりと休みなさい」

一歩後ろに下がり、双子と両親の感動の再会を眺めていた姉弟はその言葉に一礼する。

すべては元通り。
騒がしいながらも北国での変わらない日常に帰ってきたはずだっ
た。

しかし。

「なんだこれは！！！！！」

テーブルの上に積み重ねられた手紙の束を見てアドルバードは悲
鳴にも似た声を上げた。

「招待状ね」

リノルアースが冷静に説明する。

「分かるわそれくらい！ この量だ！ なんだこれ漫画でもあるま
いし！！！」

「あはやだ全部私宛だわー」

「白々しいぞそこ！！！」

指摘するにつこりとリノルアースは微笑んだ。

背筋が凍るほどに寒くなる。やっぱり南国の方が良かったかもし
れない。このままだと凍死する。

まだ家に戻っていないレイとルイが同情するようにアドルバード
を見てきた。

「なんだ、もう決定か！？」

「それともアレか！？」 女装も悪くないかもしれないなんて思った
りしたからか！？」

「自分で行け!!!」

「妹の貞操が大事じゃないのっ!?!」

「女の子が貞操言っな!!!」

恥らえ少しは!!!

しかもこのやり取りつい最近やった気がする。

じつと見てくるリノルアースから逃れるように一歩後退る。

そんな目で見んな。

「……アドル様、無理ですよ。だってあなた兄馬鹿ですから」

「そうですね、シスコンですからね」

二人揃ってため息を吐き出す。むかつく姉弟は黙れ。

くそ、否定できないから悔しい。

どうせこれも妹の作戦なんだろう。分かってる分かってはいるん

だが。

「~~~~~」

握る拳も震える。

どうしてこんな役割ばかり。

苦しいコルセットもひらひらのドレスも重苦しいかつらも。

全部やっとおサラバしたというのに。

「もう勘弁してくれ

っっ!!!!!!」

アドルバードの受難の日々はまだ終わらない。

最終話・もう勘弁してくれ

っっ！！！！！（後書き）

今まで読んでくださった方々、感想をくれた方々、そしてここを今読んでいるあなたに最大の感謝を込めて。
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4739c/>

可憐な王子の受難の日々

2011年10月11日03時12分発行